

張籍詩訳注(13)

——「吳宮怨」「北邙行」——

畑村 学
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (13)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(13)である。本篇には、25「吳宮怨」・26「北邙行」(ともに中華書局『張籍詩集』卷二)の訳注を掲載する。

訳注

25 吳宮怨

【題解】

吳王の寵愛を失った宮女の嘆きを詠じたうた。陳注に「亦た新樂府辞なり。此れ宮女の寵を被らざるを言うなり」と言う。『樂府詩集』卷九一には新題樂府として衛万の作とともに掲載される。

衛万の詩は李樊竜『唐詩選』にも採録される有名な詩だが、その生卒年や詳しい経歴は未詳であり、現存する詩も『全唐詩』卷七七三にこの詩が採録されるだけである。『樂府詩集』では衛万、張籍の順で掲載されており、同題の樂府詩を時代順に並べる『樂府詩集』の掲載方法から、衛万は張籍より前の唐代の詩人であると推測される。衛万の詩は以下の通りである。

不卷珠簾見江水
曉氣晴來雙闕間
潮聲夜落千門裏
勾踐城中非舊春
姑蘇臺下起黃塵
祇今唯存西江月
曾照吳王宮裏人

珠簾を卷かずして江水を見る
曉氣 晴れ來たる 双闕の間
潮声 夜に落つ 千門の裏
勾踐城中 旧春に非ず
姑蘇臺下 黄塵起こる
祇今 唯だ西江の月のみ有り
曾て照らす 吳王宮裏の人

前半1〜4句は華やかなりし頃の吳王の宮殿を想像して詠い、5句以降ではその呉を破った越とともに、荒廢してしまつた現在の様子を詠じる。末二

二〇〇五年十一月二十四日(受理)

君不見吳王宮閣臨江起

君見すや 吳王の宮閣 江に臨んで起こるを

畑村 学
橘 英範

宇部工業高等専門学校一般科助教
岡山大学文学部言語文科学科助教

句は有名な李白「蘇臺覽古」(王琦注本卷二二)の3・4句と全く同じであり、李白から衛万、或いは逆に衛万から李白への影響関係が考えられる。張籍の詩が、寵愛を失った宮女の嘆きを主題とした閨怨詩としての内容を備えるのに対し、衛万の詩は詩題では「怨」となっているが、昔と今の呉宮を対比した懐古詩的な内容となっている。

【本文・書き下し文】

- | | |
|------------|-------------------|
| 1 呉宮四面秋江水 | 呉宮の四面 秋江の水 |
| 2 江清露白芙蓉死 | 江清く露白くして 芙蓉死す |
| 3 呉王酔後欲更衣 | 呉王 酔いて後 衣を更えんと欲し |
| 4 座上美人嬌不起 | 座上の美人 嬌として起たず |
| 5 宮中千門復萬戸 | 宮中 千門 復た万戸 |
| 6 君恩反復誰能數 | 君恩 反復して 誰か能く数えん |
| 7 君心與妾既不同 | 君心 妾と既に同じからず |
| 8 徒向君前作歌舞 | 徒らに君前に向いて 歌舞を作す |
| 9 茱萸滿宮紅實垂 | 茱萸 宮に満ちて 紅実垂れ |
| 10 秋風嫋嫋生繁枝 | 秋風嫋嫋として 繁枝に生ず |
| 11 姑蘇臺上夕燕罷 | 姑蘇臺上 夕燕罷み |
| 12 它人侍寢還獨帰 | 它人 寢に侍して 還た独り帰る |
| 13 白日在天光在地 | 白日 天に在りて 光 地に在り |
| 14 君今那得長相棄 | 君 今 那ぞ長えに相棄つるを得んや |

【押韻】

- 水・死―上声五旨 起―上声六止(同用)
 戸―上声一〇姥 数・舞―上声九慶(同用)
 垂・枝・罷―上平五支 帰―上平八微(古詩通押)
 地・棄―去声六至

【口語訳】

- 1 呉の宮殿の四方は 秋の江がめぐるように流れ
- 2 その江が清く澄み露が白く輝くこの秋に 芙蓉は枯れ死ぬのだ
- 3 呉王は酒に酔った後 着替えて床に就こうとするが
- 4 宴席の美人は なよなよしたまま立ち上がろうとしない
- 5 宮中には 千の門に万の建物があり
- 6 君の御恩はあちこちに向けられ 誰が数え上げられましようか
- 7 君の御心が私から離れてしまった今となっては

- 8 私はいそしく君の前で歌を歌い 舞を舞うのです
- 9 茱萸は 宮殿のいたるところでその紅い実を垂れており
- 10 秋風はそよそよと 生い茂る梢に吹いています
- 11 姑蘇臺で開かれていた夜の宴会も終わり
- 12 他の宮女が夜のお仕えをする時 私はまた独り寂しく部屋に戻るので
- 13 太陽は天にあり その光は地上にあまねく注がれるものなのに
- 14 君は 今 何故私を永遠に棄て去ることができるのでしょうか

【語釈】

- 1・2 呉宮四面秋江水、江清露白芙蓉死

〔呉宮四面秋江水〕呉の宮殿の四方が江に囲まれていることを言う。

〔呉宮〕は、姑蘇山の上に呉王闔閭が築き、子の夫差が拡張した離宮である。姑蘇臺を指す(姑蘇臺については11句の【語釈】を参照)。六朝詩に三例、いずれも秦の始皇帝の時代、呉宮の守衛が燕の巢を照らそうとして失火し宮殿を焼いてしまったという故事を踏まえる。漢の袁康『越絶書』に見ゆ。一例として、鮑照「代空城雀」(『集注』巻四)に、「猶勝呉宮燕、無罪得焚窠」(猶お勝る 呉宮の燕の、罪無くして窠を焚かるを得るに)とある。唐詩には、同じ故事を踏まえた用例(李白「野田黄雀行」「双燕離」、劉禹錫「武陵觀火詩」等)以外に、呉王夫差や西施との関係で使われる例が多く見られるようになる。初唐の宋之間「浣紗篇贈陸上人」(『全唐詩』巻七八)に、「国微不自寵、献作呉宮娃」(国微えて 自ら寵せられず、献ぜられ呉宮の娃と作る)とあるのは、越から呉王夫差に西施が献上されたことを詠う。王維「西施詠」(趙注本巻五)にも、「朝為越溪女、暮作呉宮妃」(朝に越溪の女為りしも、暮には呉宮の妃と作る)と、同じく西施のことを詠じている。

呉王の宮殿である姑蘇臺は四方を水に囲まれていた。左思「呉都賦」(『文選』巻五)に、「造姑蘇之高臺、臨四遠而特建。帶朝夕之濬池、佩長洲之茂苑」(姑蘇の高臺を造れば、四遠に臨みて特り建つ。朝夕の濬池を帯び、長洲の茂苑を佩ぶ)とあり、周囲が広範囲に渡り水郷地帯であったことが記される。また、衛万の「呉宮怨」(前掲)には、「呉王宮閣臨江起、不卷珠簾見江水」(呉王の宮閣 江に臨んで起ち、珠簾を巻かずして江の水を見る)と、姑蘇臺の建つ姑蘇山のもとに江が流れていたことが記される。張籍と同時代の王建「古宮怨」(『王建詩集』巻二)にも、「呉王別殿繞江水、後宮不開美人死」(呉王の別殿 江水繞り、後宮開かず 美人死す)とあり、姑蘇臺が江に囲まれていることが詠われる。王建の詩は、詩題及び内容が張籍の詩に類似する。両者が親しい間柄であったことを考えると、両詩の制作の背景

には関係があるかもしれない。

「秋江」は秋の川。2句の「芙蓉」との関係では、蓮の実を収穫する女性の様子を詠じた23「採蓮曲」(巻一)の冒頭に、「秋江岸边蓮子多、採蓮女兒凭船歌」(秋江の岸边 蓮子多く、採蓮の女兒 船に凭りて歌う)と見えた。その【語釈】を参照。

「江清露白芙蓉死」江の水が清く澄み、露が白く置く秋の季節、芙蓉の美しい花は凋落する。

「江清」は江の水が清く澄んでいること。普通に使われる言葉のように見えるが、文学作品には古い用例が見当たらない。梁簡文帝「登烽火樓詩」(『藝文類聚』卷六三)、「聳樓排樹出、却堞帶江清」(聳樓 樹を排して出で、却堞 江を帯びて清し)とあるのは、唐以前の詩における数少ない用例のひとつ。唐代に入ると多くの用いられるようになる。うち、孟浩然「宿建德江」(『全唐詩』卷一六〇)に、「野曠天低樹、江清月近人」(野曠くして 天樹より低く、江清くして 月 人に近し)とあるのは、人口に膾炙している。李白「白紵辞三首」其二(王琦注本卷四)にも、「館娃日落歌吹深、月寒江清夜沈沈」(館娃日落ちて 歌吹深し、月寒く江清くして夜沈沈)とある。「館娃」は館娃宮のことで、吳王夫差が西施を住まわせるために硯石山上に造った宮殿。

杜甫には二例、うち「白帝城最高樓」(『詳注』卷一五)に、「峽坼雲羆竜虎臥、江清日抱鼉鼉遊」(峽坼け雲羆りて 竜虎臥し、江清く日抱きて 鼉鼉遊ぶ)とある。張籍にはこの一例のみ。

「露白」は、寒さのために露が白くなること。二十四季の一つに「白露」があり、秋の気配が強まる時期である。『札記』月令の孟秋の項に、「涼風至、白露降」(涼風至り、白露降る)とある。「露白」では古い用例が見当たらない。唐以前の詩では、庾信「周祀五帝歌十二首」の「白帝雲門舞」(『庾子山集注』卷六)に、「雲高火落、露白蟬寒」(雲高く火落ち、露白く蟬寒し)とあるのが数少ない例の一つで、秋の季節の風物を詠じている。唐詩では初唐の頃から用例があり、沈佺期「和崔正諫登秋日早朝」(『全唐詩』卷九六)に、「鷄鳴朝謁滿、露白禁門秋」(鷄鳴きて 朝謁滿ち、露白くして 禁門秋なり)と秋の字と一緒に用いられている。李白「古風五十九首」其二三(王琦注本卷二)にも、「秋露白如玉、团团下庭綠」(秋露 白くして玉の如く、团团として庭の緑に下る)と秋露が玉のように白いと表現される。また、張籍より少し前の劉商「姑蘇懷古送秀才下第歸江南」(『全唐詩』卷三〇三)に、「秋高露白万林空、低望吳田三百里」(秋高く露白くして 万林空し、吳田三百里を低く望む)とあり、この詩の同じ姑蘇臺の秋を詠じたなかで「露白」

が用いられている例である。

杜甫には二字の並びで用例が見えるが、白髪頭が露わになる(露白頭)の意味で使われておりことは異なる。張籍にはこの一例のみ。

李冬生注は、柳宗元「与崔策登西山」(『柳宗元集』卷四三)に、「鶴鳴楚山靜、露白秋江曉」(鶴鳴きて 楚山靜かに、露白くして 秋江曉かなり)とあるのを引く。張籍と同じく「秋江」と一緒に使われている。

なお、「○清○白」の句法は、杜甫の「登高」(『詳注』卷二〇)に、「風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛迴」(風急に天高くして 猿嘯哀し、渚清く沙白くして 鳥飛び迴る)とある。

「芙蓉死」は、秋になり芙蓉の花が凋落することを「死」というインパクトのある言葉で表現する。ここでは、3句以降に登場する吳王の寵愛を失った宮女を象徴的に表現していると考えられる。なお、「芙蓉」については、張籍23「採蓮曲」(巻一)の【語釈】等を参照。

陳注は、この句について「往事の豪華さを失った現在の吳宮の寂れた様子を詠じたもの」(凄冷之境、無復旧時豪華矣)とし、李建崑注も陳注の解釈を継承する(芙蓉死、謂芙蓉花之凋落也。此蓋以凄冷之境、映襯吳宮不復旧時矣)。有名な李白の「蘇臺覽古」を初めとして、吳の姑蘇臺の盛衰を詠じた懷古詩は数多くあるが、張籍のこの冒頭二句は、先述の通り宮女が置かれている境遇(失寵)を暗示していると解釈できる。類似した例として、李白「妾薄命」(王琦注本卷四)に、「昔日芙蓉花、今成斷根草」(昔日 芙蓉の花、今は断根の草と成る)とあり、寵愛を得ていた頃の美人が芙蓉の花に喩えられている。

陳注は「芙蓉死す」の類例として、李白「登金陵鳳凰臺」(王琦注本卷二一)に、「吳宮花草埋幽徑、晋代衣冠成古丘」(吳宮の花草 幽徑に埋もれ、晋代の衣冠 古丘と成る)とあるのを引いている。李白の詩は懷古詩であり、「衣冠」が貴族を指す比喩であることから対になる「花草」は吳宮に仕えていた宮女を指すと考えられる。

この「芙蓉死す」という表現が美しいイメージを持ち、当時詩人の間で流行したことについては市川桃子氏の「古典詩の中のはず——荷衰え芙蓉死す——」(『日本中国学会報』第四二集、一九九〇年)に詳細に論じられており、同様の用例も紹介されている。「芙蓉死す」については、後の【補】でも触れた。

芙蓉は出てこないが、寵愛を失った宮女を「死」というインパクトの強い言葉で表現している例として、王建「古宮怨」(前掲)に、「吳王別殿繞江水、後宮不開美人死」(吳王の別殿 江水繞り、後宮開かず 美人死す)と見える。王建の詩は張籍と同様、吳王の離宮に仕える宮女の嘆きを主題とする。

張籍の詩との直接的な関連は不明だが、両者の詩がテーマや表現において共通することがわかるであろう。

3・4 呉王醉後欲更衣、座上美人嬌不起

〔呉王〕呉の君王。直接には春秋時代の呉王夫差を指す。越から贈られた美女西施と享樂の日々を送り、ついに越王勾践に敗れて自刃した亡国の君である。

古くから史書に多く見える言葉で、文学作品では左思「呉都賦」〔文選〕卷五に、「呉王乃巾玉輅、輶驪驪」(呉王乃ち玉輅を巾り、驪驪を輶す)と見えるが、六朝期における詩語としての用例は少ない。梁の劉孝威「苦暑詩」〔藝文類聚〕卷五に、「弄風思漢朔、戲雨憶呉王」(風を弄して漢朔を思い、雨と戯れて呉王を憶う)とあるのが数少ない例のうちの一つ。

唐詩では多くの用例が見られる。姑蘇臺を懐古詩中で何度も詠じた李白の「烏棲曲」(王琦注本卷三)にも、「姑蘇臺上烏棲時、呉王宮裏醉西施」(姑蘇臺上 烏棲む時、呉王の宮裏 西施酔う)と、西施との酒宴を詠じるなかに「呉王」の語が使われている。同じ李白の「口号呉王美人半醉」(王琦注本卷二五)には、「風動荷花水殿香、姑蘇臺上見呉王」(風は荷花を動かして水殿香り、姑蘇臺上 呉王に見ゆ)と見え、「荷花」(ハス)とともに用いられている。陳注は、王昌齡「浣紗女」〔全唐詩〕卷一四三に、「呉王在時不得出、今日公然來浣紗」(呉王 在りし時 出づるを得ず、今日公然として浣紗に來たる)とあるのを引いている。

〔更衣〕衣装を着替える。徐注に次のように言う。当時皇帝や貴人の家には更衣室があり、そこには女性が仕えていた。漢の武帝が平陽公主の屋敷を訪れた際、更衣室で寵愛した女性が衛子夫であり、連れて帰って宮女とした。これ以後習慣として「更衣」の二字で皇帝と宮女が寢屋を共にすることの代名詞となった。張籍の詩の「更衣」もその意味である。陳注も「更衣」の出典として、『史記』外戚世家に載る衛子夫の記事を引き、李樹政注も徐注と同様の解釈をしている。徐注や李樹政注は、『漢書』東方朔伝に、「後乃私置更衣、從宣曲以南十二所、中休更衣、投宿諸宮、長楊・五柞・倍陽・宣曲尤幸」(後には乃ち私かに更衣を置き、宣曲従り以南の十二所に、中休更衣し、諸宮に投宿して、長楊・五柞・倍陽・宣曲 尤も幸す)とあり、顔師古注に「為休息易衣之處、亦置宮人」(休息易衣の処を為り、亦宮人を置く)とあるのを引く。

〔更衣〕の用例としては、梁の簡文帝「執筆戲書詩」〔玉臺新詠〕卷七に、「夜夜有明月、時時憐更衣」(夜夜 明月在り、時時 更衣を憐む)とあ

り、添い寝をしてくれる女性を「更衣」で表現している。また、梁の呉均「和蕭洗馬子顯古意詩六首」其二〔玉臺新詠〕卷六には、「妾本倡家女、出入魏王宮。既得承瓊輦、亦在更衣中」(妾は本 倡家の女、魏王の宮に出入す。既に瓊輦を承くるを得て、亦更衣の中に在り)とあり、魏王の更衣役として宮殿に仕えることになった女性が詠われる。

以上の用例から、ここでの「更衣」は徐注や李樹政注が指摘するように、呉王が就寝の際に女性と寢屋を共にすることを指していると考えられる。

唐詩では、崔顥「邯鄲宮人怨」〔全唐詩〕卷一三〇に、「瑤房侍寢世莫知、金屋更衣人不见」(瑤房寢に侍して 世知る莫く、金屋衣を更えて人見ず)とあり、君寵を得る宮女の様子を詠じたもの。ここでは「更衣」と対比されて張籍の詩の12句に見える「侍寢」も使われている。崔顥の詩には、これ以外にも張籍の詩と同じ語句が使われており、それらについては後の【語釈】で触れることにする。この他孟浩然「長樂宮」〔全唐詩〕卷一五九にも、「秦城旧來稱窈窕、漢家更衣応不少」(秦城旧來 窈窕たるを称し、漢家の更衣 応に少なからざるべし)とあり、漢王朝に仕える多くの宮女を「更衣」と表現している。

杜甫には用例がない。張籍にこの他一例、37「楚宮行」(卷一)に、「下輦更衣入洞房、洞房侍女尽焚香」(輦を下り衣を更えんとして洞房に入り、洞房の侍女 尽く香を焚く)とあるのもこのこと同じ意味で用いられている。

〔座上美人〕宴席に仕える美人。「美人」については、5「寄遠曲」、24「傷歌行」(以上卷一)に見えた。その【語釈】を参照。

呉王の館娃宮の美人——恐らくは西施——を詠じた李白「白紵辭三首」其二(前掲)にも、「美人一笑千黄金、垂羅舞榭揚哀音」(美人一笑 千の黄金、羅を垂れ榭を舞わして 哀音を揚ぐ)とある。張籍自身の用例では、376「離宮怨」(卷六)に、「荊王去去不復來、宮中美人自歌舞」(荊王去り去りて復た來たらず、宮中の美人 自ら歌舞す)とあり、この詩の8句と同じく、寵愛を失った宮女が、見る人もなく歌舞すると詠われている。

この「美人」について、徐注・李樹政注では宮女を指すとし、李冬生注は宮女の中で呉王夫差の寵愛を一身に受けた西施を指すとする。

〔嬌不起〕美人のなよなよとして艶めかしい様子。李白「口号呉王美人半醉」(前掲)に、「西施醉舞嬌無力、笑倚東窗白玉床」(西施酔いて舞い 嬌として力無く、笑いて東窓の白玉の床に倚る)とあるのは、呉王の愛妃である西施の酔った様子を言う。張籍がこの句を詠う時に念頭にあったかもしれない。

以上の四句がひとまとまりで、吳宮周囲の秋の風景を詠ずるとともに、5句で独白を始める吳王の宮女(美人)を客観的に詠じる。

5・6 宮中千門復万戸、君恩反復誰能數

〔宮中千門復万戸〕宮中内に寵愛を受ける多くの宮女がいることをこのように表現する。

吳王の姑蘇臺に宮女が多かったことは、『述異記』(『太平広記』卷二二六「吳王夫差」所引)に、「吳王夫差築姑蘇臺。(中略)宮妓千人。又別立春霄宮、為長夜飲」(吳王夫差 姑蘇臺を築く。(中略)宮妓千人。又別に春霄宮を立て、長夜の飲を為す)と記される。詩では、中唐の陳羽の「姑蘇臺懷古」(『全唐詩』卷三四八)に、「三千宮女看花処、人尽臺崩花自開」(三千の宮女 花を看し処、人尽き臺崩れて 花自ら開く)と、三千の宮女が花を見てまわった姑蘇臺は、今や誰もおらず臺も崩れて、手入れされることもなく花が自然に咲くばかりと詠われている。

「千門・万戸」は、宮殿の門と建物の多さを言う慣用句。それぞれ史書をはじめとして古くから用例が見える。陳注は『史記』封禪書(陳注が孝武本紀とするのは誤り)に、「於是作建章宮、度為千門万戸」(是に於いて建章宮を作り、度りて千門万戸を為る)とあるのを引いている。二つの言葉が同時に用いられた例としては、班固「西都賦」(『文選』卷一)に、「張千門而立万戸、順陰陽以開闔」(千門を張りて万戸を立て、陰陽に順いて以て開闔す)と宮殿の大きさを言うなかに見える。六朝・唐代の詩にもそれぞれ多くの用例が見えるが、「千門・万戸」が一緒に用いられた例を挙げると、駱賓王「帝京篇」(『全唐詩』卷七七)に、「三條九陌麗城隈、万戸千門平且開」(三條九陌 城の隈に麗なり、万戸千門 平且に開く)とある他、崔顥「邯鄲宮人怨」(前掲)にも、「建章宮殿不知數、万戸千門深且長」(建章宮殿 数を知らず、万戸千門 深くして且つ長し)とある。また、王維「雪中憶李楨」(趙注本卷六)に、「長安千門復万戸、何処蹀躞黃金羈」(長安千門 復た万戸、何れの処か蹀躞す 黃金の羈)とあるのは、五字の並びがこの詩と同じで、王維の詩の場合、首都長安の人の多さを言う。なお、衛万「吳宮怨」(前掲)には、「曉氣晴來双闕間、潮聲夜落千門裏」(曉氣晴れ來たる 双闕の間、潮聲夜落つ 千門の裏)と吳宮の門を「千門」と表現していた。

杜甫には二つを一緒に用いた例は見えないが、「千門」が三例、「万戸」が二例見える。張籍には、37「楚宮行」(卷一)に、「千門万戸開相当、燭籠左右列成行」(千門万戸 相当に開き、燭籠左右 列 行を成す)と一緒に用いられた例が見える他、荆王の離宮を詠じた376「離宮怨」(卷六)でも、「高堂別館連湘渚、長向春光開万戸」(高堂の別館 湘渚に連なり、長に春光に

向きて万戸を開く)と、宮女の住む別館の多さを「万戸」と表現している。「離宮怨」は、後の「歌舞」の用例でも挙げるが、この詩とテーマや使われる語句が共通する。

〔君恩〕君王の寵愛。「君」は二人称の「きみ」ではなく、ここでは君王(吳王)を指す。

六朝・唐代の詩に用例が多い。曹植「浮萍篇」(『玉臺新詠』卷二)に、「行雲有返期、君恩儻中還」(行雲 返期有り、君恩 儻しくは中ごろ還らん)とあり、また劉孝綽「班婕妤怨」(『文苑英華』卷二〇四)に、「妾身似秋扇、君恩絶履綦」(妾身 秋扇に似、君恩 履綦を絶つ)とあり、張籍の7句に見える「妾」の字とともに用いられている。唐詩でも初唐の頃より用例が多く見える。李白「白頭吟二首」其一(王琦注本卷四)に、「但願君恩顧妾深、豈惜黃金買詞賦」(但だ願う 君恩 妾を顧みることの深きを、豈に惜しまんや 黄金もて詞賦を買うを)とあるのは、この詩と同じく女性が愛する男性を指して「君恩」と述べている。杜甫には一例、「南征」(『詳注』卷二二)に、「老病南征日、君恩北望心」(老病 南征の日、君恩 北望の心)とある。

張籍にはこの他一例、同じく宮女の嘆きを詠じた29「白頭吟」(卷一)に、「君恩已去若再返、菖蒲花開月長滿」(君恩 已に去りて 再び返るが若きは、菖蒲 花開き 月長えに満ちん)とあり、君王の寵愛を二度と受けられないことを、菖蒲の花と月の比喻によって表現する。

〔反復〕定まりのないこと。ここでは君王の寵愛する女性があれこれ変わることを言う。

全唐詩・静嘉堂本・百家本他多くのテキストが「反覆」に作るが意味は同じ。詩語としては「反覆」の方が古くから多くの用例がある。なお、蜀刻本のみが「返覆」に作る。

班固「西都賦」(『文選』卷一)に、「草木塗地、山淵反覆」(草木 地に塗れ、山淵反覆す)とあり、その李善注に「反覆は、猶お傾動のごときなり」と言う。六朝では、「子夜四時歌七五首」の「夏歌二十首」其二(『樂府詩集』卷四四)では、「反覆華簾上、屏帳了不施」(華簾の上に反覆し、屏帳 了として施さず)と、むしろの上でごろごろと寝返りを打つことを「反覆」で表現し、梁の劉孝威「夜不得眠詩」(『類聚』卷三五)では、「夜長愁反覆、懷抱不能裁」(夜長くして 愁いて反覆し、懷抱 裁つ能わず)と、上と同様に寝返りを打つ意味で用いられている。

唐詩にも用例が多く、崔顥「孟門行」(『全唐詩』卷一三〇)に、「諛言反覆那可道、能令君心不自保」(諛言反覆して 那ぞ道うべけんや、能く君心

をして自ら保たざらしむ」とある。これは人の悪口を言ったり人におもねたりする者の言葉がころころ変わることを「反覆」と言い、張籍の使い方と類似する。また、同じ崔顥の「邯鄲宮人怨」(前掲)にも、「念此翻覆復何道、百年盛衰誰能保」(此を念うに翻覆 復た何ぞ道わん、百年の盛衰 誰か能く保たん)とあり、君王の寵愛を失い、一転して実家に戻された宮女の流転を「翻覆」の語で表現する。「翻覆」は「反覆」と同音で、意味も同じ。

杜甫には「反復」「反覆」併せて九例あり、杜甫が好んで用いた言葉と言えよう。一例として、「杜鵑行」(『詳注』巻一〇)に、「蒼天變化誰料得、万事反覆何所無」(蒼天の變化 誰か料り得えんや、万事の反覆 何の無き所ぞ)とある。張籍にはこの一例のみ。

この二句、陳注に「君恩の恃むべからざるを言うなり」(言君恩不可恃也)と言うように、宮中にはたくさんの宮女がおり、吳王の寵愛があちこちへと向けられるため、頼りとすることができないことを言う。

7・8 君心与妾既不同、徒向君前作歌舞

〔君心〕 君王の御心。

古くから用例の見られる言葉。詩の用例をいくつか挙げると、六朝詩では「近代吳歌九首」冬歌(『玉臺新詠』巻一〇)に、「我心如松柏、君心復何似」(我が心は松柏の如し、君が心は復た何にか似ん)とあり、傅玄「歴九秋篇董逃行」(『玉臺新詠』巻九)に、「顧多君心所親、乃命妙妓才人」(顧みるに君心の親しむ所多からん、乃ち妙妓才人に命ず)とある。唐詩では、喬知之「定情篇」(『全唐詩』巻八一)に、「此時妾比君、君心不如妾」(此の時 妾 君に比すれば、君が心 妾に如かず)とあり、李白「白紵辭三首」其二(前掲)に、「鄆中白雪且莫吟、子夜吳歌動君心」(鄆中白雪 且く吟ずる莫かれ、子夜吳歌 君心を動かす)とある。

杜甫には熟語としての用例はない。張籍にこの他一例。437「楚妃怨」(巻七)に、「章華殿前朝下国、君心独自無終極」(章華殿前 下国に朝するも、君心 独自 終極する無し)とあるのも君王(楚王)の御心の意。

張籍のこの詩と同じく、君王の寵愛を失った宮女を主人公にした李白「妾薄命」(前掲)に、「君情与妾意、各自東西流」(君が情と妾の意と、各自東西に流る)とある。李白の詩は女性が自分を芙蓉に準えるなど(昔日芙蓉花、今成断根草)、この詩と類似する表現が見られ、張籍が詩を作る際に意識したかもしれない。

〔徒向君前作歌舞〕 寵愛を失った今となっては、御君の前での歌舞も、ただ

目や耳を楽しませるだけで、その心に届くことはない。

「向君前」は君王の前での意。湯惠休「白紵歌三首」其二(『樂府詩集』巻五五)に、「少年窈窕舞君前、容華艷艷將欲然」(少年窈窕として 君前に舞い、容華艷艷として 將に然えんと欲す)とあるのも、君の前で女性が舞を舞う様子を詠う。唐詩にもいくつか用例があるが、杜甫には一例も用いられていない。張籍にはこの他一例、29「白頭吟」(巻一)に、「憶昔君前嬌笑語、兩情宛轉如繁素」(憶う昔 君前 嬌として笑語し、兩情宛轉として繁素の如かりしを)とあり、また32「羈旅行」(巻一)に、「誰能聽我辛苦行、為向君前歌一声」(誰か能く我が辛苦の行を聴く、為に君前に向いて一声を歌わん)とあるのは、「向・歌」もこのこと共通する。

〔歌舞〕 歌と舞。古くから詩文に用例のある言葉で、文学作品では左思「三都賦序」(『文選』巻四)に、「風謠歌舞、各附其俗」(風謠歌舞は、各おの其の俗に附く)とあり、六朝詩では王粲「從軍詩五首」其一(『文選』巻二七)に、「歌舞入鄴城、所願獲無違」(歌舞して鄴城に入り、願う所は 獲て違う無し)とあるなど多くの用例がある。唐詩の用例も多く、陳注は杜甫「漢陂行」(『詳注』巻三)に、「湘妃漢女出歌舞、金支翠旗光有無」(湘妃漢女 出でて歌舞し、金支翠旗 光 有無)とあるのを引く。杜甫にはこの他一三例ある。吳王との関連では、李白「烏棲曲」(前掲)に、姑蘇臺で開かれる長夜の宴を詠じて、「吳歌楚舞歛未畢、青山欲銜半辺日」(吳歌楚舞 歛び未だ畢さざるに、青山 半辺の日を銜まんと欲す)と「吳歌楚舞」の並びで見える。熟語では、陳羽「吳城覽古」(『全唐詩』巻三四八)に、「春色似憐歌舞地、年年先發館娃宮」(春色 歌舞の地を憐れむに似、年年先ず館娃宮に発く)とある。この場合、「歌舞の地」とは、吳王夫差が西施のために作った館娃宮を指す。張籍にはこの他一四例、うち376「離宮怨」(巻六)に、「荊王去去不復來、宮中美人自歌舞」(荊王去り去りて 復た來たらず、宮中の美人 自ら歌舞す)とあり、君王が去った後、一人寂しく歌舞をする宮女を詠じ、この詩と類似する。

以上の四句がひとまとまりで、4句に登場した「美人」が、寵愛を失った今の状況を自分の言葉で語っている。

9・10 茱萸滿宮紅実垂、秋風嫋嫋生繁枝

〔茱萸滿宮紅実垂〕 秋になり、宮殿内にはびこる茱萸が赤い実を実らせている様子を表現する。

茱萸は「かわはじかみ」で、秋を代表する風物。山茱萸・食茱萸・吳茱萸

等の三種類がある。また、秋の重陽節で用いるのは吳の地方で採れる吳茱萸であるとされる(植木久行氏の『唐詩歳時記』を参照。二八〇頁、講談社学術文庫)。この詩も季節は秋で吳の地方を舞台としている。それがここに茱萸が登場する第一の理由であろう。

さらにもう一つ、この茱萸は、2句の、吳王の寵愛を失った宮女を象徴する「芙蓉」と対比されて、君王の寵愛を受ける宮中の女性たちを暗示しているのではなからうか。曹植「浮萍篇」(『玉臺新詠』卷二)に、「茱萸自有芳、不若桂与蘭。新人雖可愛、無若故人歡」(茱萸 自ら芳有れども、桂と蘭とに若かず。新人 愛すべしと雖も、故人の歡びに若くは無し)とあるのは、茱萸を新しい嫁(新人)に、桂・蘭をもとの嫁(故人)に準えた例である。梁の何思澄「擬古」(『玉臺新詠』卷六)にも、「新知雖可悦、不異茱萸香」(新知 悦ぶべきと雖も、茱萸の香に異ならず)とあり、前夫の新しい妻(新知)が茱萸に準えられている。趙幼文校注『曹植集校注』(台湾・明文書局)の注では、茱萸は香りが強いが、蘭や桂の芳しい香が淡く遠くまで漂うのには及ばない。古人はいつも茱萸を小人の、蘭や桂を賢者の比喩としたと説明する(茱萸香氣辛烈、不及蘭桂逸馨之淡遠。古人常以茱萸象徵小人、而似蘭・桂比喩賢者)。

「茱萸」の用例は唐代にも多くの用例があるが、曹植や何思澄のような使い方は管見では見られなかった。

陳注は、有名な王維「九月九日憶山東兄弟」(趙本卷一四)に、「遙知兄弟登高處、遍插茱萸少一人」(遙かに知る 兄弟 高きに登る處、遍く茱萸を挿して一人を少くを)とあるのを引いている。杜甫には三例、いずれも重陽節と関連する内容の詩に見える。うち「九日曲江」(『詳注』卷二)に、「綴席茱萸好、浮舟菡萏衰」(席に綴りて 茱萸好し、舟を浮かべて 菡萏衰う)とあるのは、この詩と同じく、凋落する蓮の花との対比で茱萸が用いられている。張籍にこの他一例、424「烏棲曲」(卷七)に、「西山作宮潮滿池、宮鳥曉鳴茱萸枝」(西山 宮を作りて 潮は池に満ち、宮鳥 曉鳴く 茱萸の枝)とあるのは、この詩と同じく吳王の宮殿を詠じるなかに見える。

「満宮」宮殿のいたるところで。

宋玉「楚辭」招魂に、「盛鬋不同制、実満宮些」(盛鬋 制を同じくせず、宮に実満す)とあるのは、娘たちがあふれる様子を言う。普通に使われることばのように見えるが、熟語としては六朝詩に用例がない。唐詩では中唐の始め頃から用例が見え、盧綸「奉和聖製麟德殿宴百僚」(『全唐詩』卷二七六。一作常袞「奉和聖製麟德殿燕百僚」)に、「千秋不可極、花發満宮香」(千秋 極むべからず、花発きて 満宮の香)とある他、元稹「連昌宮詞」(『元

稹集』卷二四)にも、「連昌宮中満宮竹、歳久無人森似束」(連昌宮中 満宮の竹、歳久しく人無くして 森として束に似たり)と見える。

杜甫には用例がない。張籍にこの他一例、218「寒食内宴二首」其一(巻四)に、「朝光瑞氣満宮樓、綵繡魚竜四面稠」(朝光の瑞氣 宮樓に満ち、綵繡の魚竜 四面に稠し)とある。

「紅実」茱萸の紅い実。

六朝詩に用例はない。唐詩にも用例は少なく、張籍以前では、司空曙「秋園」(『全唐詩』卷二九三)に、「強向衰叢見芳意、茱萸紅実似繁花」(強いて衰叢に向いて芳意を見れば、茱萸の紅実 繁花に似たり)とあるのを数えるのみ。秋の花園に実る茱萸を「紅実」と表現している。同時代の白居易「六年春、贈分司東都諸公」(二二四四)に、「法酒淡清漿、含桃爛紅実」(法酒は淡清の漿、含桃は爛紅の実)とあり、含桃(さくらんぼ)の実が柔らかく紅いと表現される。張籍にはこの一例のみ。

「秋風嫋嫋」秋風がそよそよと吹くさま。

「秋風・嫋嫋」ともに、『楚辭』九歌「湘夫人」に、「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」(嫋嫋たる秋風、洞庭波だちて木葉下る)と見える。王逸注に「嫋嫋、秋風揺木貌」(嫋嫋は、秋風の木を揺らす貌)とある。「湘夫人」は、帝子(湘君)との会合を待ち望む湘夫人の思いが詠われており、張籍はそうした背景も意識してこの言葉を使っているのかもしれない。

「秋風」は古くから多くの用例がある。張籍にも3「雜怨」(巻一)に、「一切切重切切、秋風桂枝折」(切切 重ねて切切、秋風 枝折を折る)と見えた。その「語釈」を参照。

「嫋嫋」は六朝・唐代を通じて詩のなかで多くの用例が見える。『楚辭』を踏まえて「秋風」とともに用いられた例としては、謝靈運「石門新宮所住四面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩五言」(『文選』卷三〇)に、「嫋嫋秋風過、萋萋春草繁」(嫋嫋として 秋風過ぎ、萋萋として 春草繁し)とあり、劉宋の湯惠休「歌詩」(『類聚』卷三)に、「秋風嫋嫋入曲房、羅帳含月思心傷」(秋風嫋嫋として 曲房に入り、羅帳 月を含んで 思心傷む)とある。唐詩では、陳子昂の「感遇詩三十八首」其二(『全唐詩』卷八三)に、「遲遲白日晚、嫋嫋秋風生」(遅遅として 白日晚れ、嫋嫋として 秋風生ず)とあり、王維「和陳監四郎秋雨中思從弟拙」(趙本卷一)にも、「嫋嫋秋風動、淒淒烟雨繁」(嫋嫋として 秋風動き、淒淒として 烟雨繁たり)と見える。

杜甫にも二例あり、うち「戲作寄上漢中王二首」其一(『詳注』卷一二)には、「秋風嫋嫋吹江漢、只在他鄉何処人」(秋風嫋嫋として 江漢を吹き、

只だ他郷に在るは 何処の人ぞ」と、「秋風」とともに用いられている。張籍の用例はこの一例のみ。

蜀刻本・全唐詩・百家注本は「裊裊」に作り、叩彈集はその本字である「裊裊」に作る。いずれも「嫋嫋」と同音で同じ意味を表す。鮑照「採菱歌七首」其四（『集注』卷四）に、「裊裊風出浦、容容日向山」（裊裊として 風は浦を出で、容容として 日は山に向かう）とあり、謝朓「秋竹曲」（『校注』卷二）に、「從風既裊裊、映日頗離離」（風に從いて 既に裊裊とし、日に映じて 頗る離離たり）とある。謝朓の例は風に竹がなびく様子を言う。

〔繁枝〕葉の茂った枝。

六朝詩には一例、傅玄「和班氏詩」（『玉臺新詠』卷二）に、「素手尋繁枝、落葉不盈筐」（素手 繁枝を尋ぬるも、落葉 筐に盈たず）とあるのを数えるのみである。真白い手で葉の茂った枝を探して摘むのだが、摘み落とされる葉は竹かごにはいっぱいにならぬ。唐詩では、杜甫「江畔独步尋花七絶句」其七（『詳注』卷一〇）に、「繁枝容易紛紛落、嫩蕊商量細細開」（繁枝は容易に 紛紛として落ち、嫩蕊は商量して 細細として開く）とあるのが最も早い例であるが、中唐に入ると用例が見られるようになる。中唐前期の盧綸「郊居对雨寄趙涓給事包佶郎中」（『全唐詩』卷二七八）に、「繁枝留宿鳥、碎浪出寒魚」（繁枝 宿鳥留まり、碎浪 寒魚出づ）とあり、張籍と関係のあった韓愈「遊城南十六首・風折花枝」（『繫年集』卷九）に、「春風也是多情思、故揀繁枝折贈君」（春風も也是 情思多し、故に繁枝を揀びて折りて君に贈る）とある。張籍はこの一例のみ。

11・12 姑蘇臺上夕燕罷、它人侍寝還独歸

〔姑蘇臺〕姑蘇山の上に呉王闔閭が築き、子の夫差が拡張した離宮。詩題及び1句の「呉宮」を指す。その【語釈】及び【題解】を参照。第5句の語釈でも触れたが、『述異記』（前掲）に次のようにある。

呉王夫差築姑蘇臺。三年乃成。周環詰屈、横亘五里。崇飾土木、殫耗千人。宮妓千人。又別立春霄宮、為長夜飲。

呉王夫差 姑蘇臺を築く。三年にして乃ち成る。周環詰屈として、横五里に亘る。土木を崇飾し、千人を殫耗す。宮妓千人なり。又別に春霄宮を立て、長夜の飲を為す。

三字の並びでは六朝詩に用例がほとんどなく、梁の陸倕「以詩代書別後寄贈詩」（『文苑英華』卷二四七）に、「心属姑蘇臺、目送邯鄲道」（心は姑蘇の

臺に属なり、目は邯鄲の道を送る）とある他、一例を数えるのみである。唐詩では盛んに用いられる素材となり、李白「烏棲曲」（前掲）の、「姑蘇臺上烏棲時、呉王宮裏醉西施」（姑蘇臺上 烏棲む時、呉王の宮裏 西施酔う）や、同じく李白「口号呉王美人半醉」（前掲）に、「風動荷花水殿香、姑蘇臺上宴呉王。西施醉舞嬌無力、笑倚東窗白玉床」は、呉王夫差と西施を詠じたものである。杜甫にも一例、「壯遊」（『詳注』卷一六）に、「東下姑蘇臺、已具浮海航」（東のかた 姑蘇臺に下り、已に浮海の航を具う）とある。張籍にはこの一例のみである。陳注は、衛万「呉宮怨」（前掲）に、「勾踐城中非旧春、姑蘇臺下起黄塵」（勾踐城中 旧春に非ず、姑蘇臺下 黄塵起こる）とあるのを引いている。

〔夕燕〕「燕」は宴・讌に同じ。蜀刻本は「夕讌」に作る。

「夕べに宴す」と「宴」を動詞として用いる例は六朝の頃から見える。魏文帝「銅雀園詩」（『類聚』卷二八）。「樂府詩集」等では「善哉行」に作る）に、「朝遊高臺觀、夕宴華池陰」（朝に高臺觀に遊び、夕べに華池の陰に宴す）とあり、謝靈運「三月三日侍宴西池詩」（『藝文類聚』卷四）にも、「礼備朝容、樂闋夕宴」（礼は朝容に備わり、樂は夕宴に闋わる）とある他、鮑照「代君子有所思」（『文選』卷三一）にも、「陳鍾陪夕讌、笙歌侍明發」（鍾を陳ねて夕讌に陪し、笙歌して明發に侍す）と見える。唐詩でも、初唐の盧照隣「贈許左丞從駕万年宮」（『全唐詩』卷四二）に、「朝參五城柳、夕宴柏梁杯」（朝に五城の柳に參し、夕べに柏梁杯に宴す）とあり、韋応物「禮上醉題寄滌武」（『全唐詩』卷一八七）に、「芳園知夕燕、西郊已獨還」（芳園 夕燕を知り、西郊 已に独り還る）とある。

杜甫には用例がない。張籍にもこの一例のみ。

姑蘇臺での長夜の宴については、前掲『述異記』及び李白「烏棲曲」に見えた。

〔它人〕他の人。全唐詩は「佗人」に、蜀刻本他多くのテキストは「他人」に作るが、いずれにしても意味は同じ。

古くから詩文に用例のあることばで、『毛詩』鄭風「褰裳」に、「子不我思、豈無他人」（子 我を思わざれば、豈に他人無からんや）とあるなどいくつか用例がある。六朝では、陸機「文賦」（『文選』卷一七）、「雖杼軸於予懷、杼佗人之我先」（予が懷に杼軸すと雖も、佗人の我に先んずることを杼る）とあり、陶淵明「挽歌詩」（『文選』卷二八）に、「親戚或餘悲、佗人亦已歌」（親戚 或いは悲しみを餘すも、佗人 亦た已に歌う）とある。唐詩にも用例が多く、李白「妾薄命」（前掲）に、「以色事他人、能得幾時好」（色を以

て他人に事う、能く幾時の好みを得ん」とある。同時代の白居易「自感」(二三三四)、「賓客歎娛僮僕飽、始知官職為他人」(賓客は歎娛し、僮僕は飽く、始めて知る、官職は他人の為にするを)とある。
李冬生注では、『集韻』に「佗、一曰美也」とあるのを引いて、ここの「佗人」(他人、佗人)は美人の意であるとす。しかし、張籍以前および同時代にそうした用例は見られず、ここも他人の意味で解釈するのが妥当であろう。

〔侍寝〕寝所にはべる。添い寝する。徐注に「即ち更衣なり」と言い、3句の「更衣」と同じ意味であるとす。

後漢の繁欽「定情詩」(『玉臺新詠』卷一)に、「思君即幽房、侍寝執衣巾」(思う、君が幽房に即き、寝に侍して衣巾を執らんことを)とあるのは、このことと同じく女性が男性の寝間に侍ること。六朝の詩には他に用例を見いだせないが、唐代に入ると初唐から用例が見られるようになる。沈佺期「鳳簫曲」(『全唐詩』卷九五)に、「飛燕侍寝昭陽殿、班姬飲恨長信宮」(飛燕、寝に昭陽殿に侍し、班姬、恨みを長信宮に飲む)とあり、また、崔顥「邯鄲宮人怨」(前掲)に、「瑤房侍寝世莫知、金屋更衣人不见」(瑤房寝に侍して、世知る莫く、金屋衣を更うるは、人見ず)とあるのは、前述したように「更衣」と対にして用いられていた。寵愛を失った宮女の嘆きを詠じた李白「怨歌行」(王琦注本卷五)にも、「君王選玉色、侍寝金屏中」(君王、玉色を選び、寝に侍す、金屏の中)とある。

以上の四句がひとまとまりで、前四句に引き続き美人のセリフとなつてゐる。呉宮の秋の風景を詠じるとともに、宴会が終わった後、寂しく自室へ帰る様子を詠っている。

13・14 白日在天光在地、君今那得長相棄

〔白日在天光在地〕この句の解釈は、注釈書によって分かれている。

陳注は、次句も含めて「照察を蒙らざるを言うなり」とし、呉王の照察が受けられない、寵愛を得られないことの喩えとして解釈する。すなわち、白日の光は呉王の寵愛で、その寵愛が他の宮女たちには注がれるのに対し、自分だけに注がれないことを言うとする。

李建崑注は、自分の心はきらきらと太陽の光が地を照らすように明らかであるのに、どうして君の明察(寵愛)を得られないのか(此以白日為喩、謂己心昭然若天光之麗地、奈何不獲明察也)とする。すなわち、白日の光は宮女自身の心を喩えると解釈する。

徐注では、宮女が自分の思いを訴えかける相手が白日(天)であるとし(猶言青天白日明明如此、如果憑天說話、你那能棄掉我呢?)、李樹政注もその解釈を継承する(青天白日明明如此、老天爺啊!他如今哪能這樣永遠棄掉了我)。

この句を理解する上で、劉楨「贈徐幹」(『文選』卷二三)が参考になろう。

仰視白日光	仰ぎて白日の光を視れば
皦皦高且懸	皦皦として、高く且つ懸かなり
兼燭八紘内	八紘の内を兼ね燭し
物類無頗偏	物類、頗偏する無し
我獨抱深感	我独り深き感を抱き
不得與比焉	与に焉に比ぶことを得ず

劉楨の詩は、同じ宮中にいながら友人(徐幹)に会えない憂いを詠じた内容であり、上に挙げた箇所は詩の末尾に当たる。孤独で憂い悲しむさまを、万人に注がれる日の光を自分一人だけが浴びていないと表現している。劉楨の詩に倣った鮑照「学劉公幹体五首」其五(『集注』卷六)には、「白日正中時、天下共明光。北園有細草、当昼正含霜」(白日、正に中するの時、天下、明光を共にす。北園に細草有り、昼に当たりて正に霜を含む)とあり、公平に注がれるはずの日の光を受けることのない「細草」が詠われる。この「細草」は不遇の士を喩えている。

張籍の場合も、呉王の寵愛を失った宮女が今の孤独と憂いを表現していると考えられる。

唐詩中で、同様の意味で「白日」の語を用いている例がいくつもある。李白「東武吟」(王琦注本卷五)に、「白日在高天、迴光燭微躬」(白日、高天に在り、迴光、微躬を燭らす)とあるのは、太陽がつまりらぬ自分を照らしてくれたおかげで宮中に仕えるようになったと詠われる。また、同じ李白の「臨江王節士歌」(同卷四)には、「白日当天心、照之可以事明主」(白日、天心に当たり、之を照らせば以て明主に事うべし)とあり、太陽が照らしてくれば明主に仕えることもできるのに、それが実現されない節士の嘆きが詠われる。

以上の用例から、ここでは先の陳注に従って解釈した。

〔君今那得長相棄〕自分一人が寵愛を受けられない不満を述べる。男性から捨てられることを「棄」の語で表現する例は古くから見られるが、張籍自身の詩にも、29「白頭吟」(卷一)に、「春天百草秋始衰、棄我不待白頭時」(春

天の百草 秋に始めて衰うるに、我を棄つること白頭の時を待たず」とあり、462「離婦」(巻七)に、「念君終棄捐、誰能強在茲」(君が終に棄捐するを念えば、誰か強く強いて茲に在らんや)とある。

なお、「那」を、蜀刻本は「誰」に、樂府詩集・百家注本は「詎」に作る。

以上の二句がひとまとまりで、自分一人が呉王の寵愛を得られない憂いを訴えて詩を結んでいる。

【補】

一 張籍「吳宮怨」の構成

この詩は換韻の箇所によって四段に分けることができる。

- 1 〵 4 吳宮の周囲の様子と酒宴での呉王・宮女(作者の視点)
- 5 〵 8 吳王の変心と宮女の失意(宮女の独白①)
- 9 〵 12 吳宮内の自然と酒宴後の様子(宮女の独白②)
- 13・14 宮女の訴え(宮女の独白③)

1 〵 4句では、「呉王」「美人」とあるように、この詩の舞台である吳宮と宴席の二人が、作者の視点で客観的に描写されている。しかし、5句以降では、「君」「妾」の呼称によって、呉王の寵愛を失った宮女(〵 4句「美人」)のセリフとなっていることがわかる。

二 同時代人による「吳宮怨」評価

【語釈】で指摘したように、市川桃子氏は前掲論文のなかで、この詩の「芙蓉死す」は、衰残のハスによって美人を表現した詩の中でも特に同時代や後世に大きな影響を与えた優れた表現であるとし、同じ表現を用いた例として劉禹錫や李賀、孟郊の詩を挙げています。

李賀や孟郊の詩は、自分の詩のなかに「芙蓉死す」の表現を取り込んだものだが、劉禹錫の場合はそれとは異なっていたかたちで張籍の表現を用いている。

劉禹錫「和令狐相公言懷寄河中楊少尹」(『箋証』外集卷三)は令狐楚の詩に唱和したものだ、この詩の冒頭で劉禹錫は、自分がかつて交遊した天下に名を馳せた詩人で、今はすでに死去している者として張籍と李益を挙げ、二人の死を悼んでいる。今、冒頭の四句を挙げると以下のようである。

- 1 章句慚非第一流 章句は第一流に非ざるを慚ずるも
 - 2 世間才子昔陪遊 世間の才子 昔陪遊せり
 - 3 吳宮已歎芙蓉死 吳宮 已に歎ず 芙蓉の死
- 張司業詩云、「吳宮四面秋江水、天清露白芙蓉死」。
- 4 辺月空悲蘆管秋 辺月 空しく悲しむ 蘆管の秋
- 李尚書。

3句の自注には張籍「吳宮怨」の1・2句が引かれ、4句の自注では、この句が李益のことを詠ったものであることを明記している。

李益を悼んだ4句は、3句で張籍の詩を踏まえたのと同様に、李益の詩を踏まえている。その詩とは「夜上受降城聞笛」(『全唐詩』卷二八三)である。李益のこの詩は、李樊龍の『唐詩選』に採録されていることで有名だが、李益はすでに当時から詩人として名を知られ、特に出征兵士の心情を詠じた詩が高い評価を得ていたこと、なかでもこの「夜上受降城聞笛」詩は取りわけ高く評価されていたことが、同時代の資料である李肇『唐国史補』等からうかがえる。

劉禹錫は李益の死を悼む4句で、李益の得意とした辺塞詩で、かつとりわけ有名な詩を踏まえて詠じている。3句の自注で張籍の詩句を引用したのと対照的に、4句の自注では李益の詩句を引用していないのは、4句が李益の「夜上受降城聞笛」詩を踏まえたものが読者に明白であったことを示している。

さて、一方の張籍であるが、劉禹錫が李益の辺塞詩と対にするかたちで張籍の閨怨詩を取り上げたのは、(へ)辺塞詩 || 兵士の憂い (↑) 閨怨詩 || 思婦の嘆き)という単純な図式化によるものではなく、思婦の怨情を詠ずることが張籍の詩の特徴の一つであり、張籍に対する当時の一般的な評価を踏まえたものであったのではなからうか。すでに辺塞詩人として著名であった李益と対にするからには、そうした評価が当時張籍にあったと推測されるのである。

そして、女性の怨情を詠じた張籍の詩のなかで、特にこの「吳宮怨」を取り上げられたのは、市川氏が指摘するように「芙蓉の死」という表現が斬新で高く評価されていたこと、「死」の語が張籍の「死」と直接結びつくこと等の理由が考えられる。

なお、張籍の詩に描かれる女性を論じたものに、高若蘭「詩論張籍詩中的婦女形象」(『大陸雜誌』九五—二、一九九七年八月)がある。

※1この詩の訳注は、「第九回劉禹錫讀書會報告」(『中唐文学会報』第十一号、二〇〇四年。陣内孝文氏担当)に掲載されている。

※2『箋証』は「暗陪」に作り、紹本・崇本等が「昔陪」に作ることを指摘する。今、「昔陪」に従って解釈する。

※3『唐国史補』(卷下)に次のようにある。

李益詩名早著、有「征人歌」一篇、好事者画為図障。又有云、「回楽峯前沙似雪、受降城外月如霜。不知何処吹蘆管、一夜征人尽望郷」。天下亦唱為楽曲。

李益の詩名 早に著れ、「征人歌」一篇有りて、好事者 画して図障を為る。又云有り、「回楽峯前 沙 雪に似たり、受降城外 月 霜の如し。知らず 何れの処にか 蘆管を吹く、一夜征人 尽く郷を望む」。天下亦唱いて楽曲と為す。

「有征人歌一篇」は、上海古籍出版社刊『唐国史補・因話録』(もと古典文学出版社刊)所掲の文章では「有征人歌且行一篇」に作るが、同じ記事が掲載される王謙撰・周勳初校証『唐語林校証』(中華書局)に基づき改めた。同じ記事は『旧唐書』李益伝にも掲載されており、そこでは「其征人歌・早行篇、好事者画為屏障」となっている。(畑村)

26 北邙行

【題解】

北邙山のうた。北邙山(北芒山)は邙山(芒山)ともいい、洛陽の北の郊外に東西約二〇〇キロにわたって広がるなだらかな丘陵地帯。古来、王侯や官僚の墓が営まれ、我が国の鳥部山のような場所となった。李冬生注によれば、建武十年に恭王祉が北邙に葬られたことに始まるという。

後漢の『藝文類聚』山部にも、嵩山・華山・廬山等の諸名山と並んで「北邙山」の項がある(卷七)。この山と山にまつわる唐詩については、植木久行氏『唐詩の風土』(研文出版、一九八三年)および『唐詩の風景』(講談社学術文庫、一九九九年)に詳しい。

『樂府詩集』卷九四「新樂府辞五」の部分に「北邙行」があり、王建の作とこの詩を収めている。その解題にいう。

晋張協「登北邙賦」曰、「陟巒丘之巖陀、升逶迤之修坂。回余車於峻嶺、

聊送目於四遠。伊洛混而東流、帝居赫以崇頭。於是徘徊絕嶺、踟躕步趾。前瞻狼山、却闕大岷、東眺虎牢、西睨熊耳。邪亘天際、旁極万里。莽眩眼以芒昧、諒群形之難紀(『樂府詩集』は「維紀」に作るが、『藝文類聚』七に従って改める)。爾乃地勢宏隆、丘墟陂陀。墳隴崑崙、棋佈星羅。松林摎映以攢列、玄木搜寥而振柯。壯漢氏之所營、望五陵之嵬峨。『後漢書』曰、「光武葬於原陵。」「帝王世紀」曰、「原陵在臨平亭東、去洛陽十五里。」朱超石「与兄書」曰、「登北邙遠眺、衆美都尽。」且言光武墳迥奇甚美、即原陵蓋在北邙也。『魏志』曰、「明帝欲平北邙、令登台觀見孟津。廷尉辛毗諫止之。」按北邙行、言人死葬北邙、与梁甫吟・泰山吟・蒿里行同意。

晋の張協の「北邙に登るの賦」に曰く、「巒丘の巖陀たるを陟り、逶迤たるの修き坂を升る。余が車を峻嶺に回らし、聊か目を四遠に送る。伊洛は混じりて東に流れ、帝居は赫として以て崇頭なり。是に於いて絶嶺を徘徊し、歩みし趾を踟躕せしむ。前に狼山を瞻、却つて大岷を闚い、東のかた虎牢を眺め、西のかた熊耳を睨む。邪めに天際に亘り、旁く万里を極む。莽として眼を眩まして以て芒昧とし、諒に群形の紀め難し。爾して乃ち地勢は宏隆とし、丘墟は陂陀たり。墳隴は崑崙として、棋佈し星羅す。松林は映けるを摎りて以て攢まり列なり、玄木は寥しきを搜して柯を振る。漢氏の営む所を壯とし、五陵の嵬峨たるを望む」と。『後漢書』(明帝紀)に曰く、「光武は原陵に葬らる」と。『帝王世紀』に曰く、「原陵は臨平亭の東に在り、洛陽を去ること十五里」と。朱超石の「兄に与うるの書」に曰く、「北邙に登りて遠く眺むれば、衆美 都て尽くす」と。且つ光武の墳辺の杏の甚だ美なるを言へば、即ち原陵は蓋し北邙に在るなり。『魏志』(辛毗伝)に曰く、「明帝北邙を平らにせんと欲し、台觀に登りて孟津を見しむ。廷尉辛毗 諫めて之を止む」と。按ずるに北邙行は、人の死して北邙に葬らるを言い、梁甫吟・泰山吟・蒿里行と同意なり。

張修蓉氏『中唐樂府詩研究』は新題新意に分類し、この詩の主旨は、命とは限りのあるものだから、名利をあまり重視しすぎてはいけないということだと説明している。

『樂府詩集』や『全唐詩』を見る限りでは、「北邙行」の樂府題は張籍・王建らの創始になるようだが、初唐の頃に北邙山をテーマとする樂府的作品が作られていたようである。そのことについては【補】の部分で触れることにする。

張籍のこの詩は、北邙山のイメージに基づいて人の死に関して詠じたものであり、前代の北邙に関する作品や挽歌の系統の作品と共通した表現が多く

見られる。ただ、この詩の他には、張籍が詩の中で北邙山について触れたものはないようだ。
 なお、蜀本・百名家本等は詩題を「北邙山」に作っており、『全唐詩』の注によれば「白邙山」に作るテキストもあるという。「白邙」は別の山を指すはるか後代の用例しか見えないことばであり、誤りであると思われる。

【本文・書き下し文】

- 1 洛陽北門北邙道 洛陽の北門 北邙の道
- 2 喪車隣隣入秋草 喪車 隣隣として 秋草に入る
- 3 車前齊唱薤露歌 車前 齊唱す 薤露の歌
- 4 高墳新起日峨峨 高墳 新たに起り 日に峨峨たり
- 5 朝朝暮暮人送葬 朝朝 暮暮 人 葬を送るも
- 6 洛陽城中人更多 洛陽城中 人 更に多し
- 7 千金立碑高百尺 千金 碑を立て 高さ百尺
- 8 終作誰家柱下石 終に 誰が家の柱下の石と作る
- 9 山頭松柏半無主 山頭の松柏 半ばは主無く
- 10 地下白骨多於土 地下の白骨 土よりも多し
- 11 寒食家家送紙錢 寒食 家家 紙錢を送るも
- 12 烏鴛作窠銜上樹 烏鴛 窠を作るに 銜みて樹に上る
- 13 人居朝市未解愁 人 朝市に居りて 未だ愁ひを解さず
- 14 請君暫向北邙遊 君に請ふ 暫く北邙に向いて遊べ

【押韻】

- 道・草―上声三二皓
 歌・峨・多―下平七歌
 尺・石―入声二二昔
 主・樹―上声九麌 土―上声一〇姥 (同用)
 愁・遊―下平一八尤

※樹は、動詞の時上声九麌、名詞の時去声一〇遇という区別があるようだが、ここでは便宜上動詞の音で押韻したか、あるいは上去通押の韻であるため上声と去声で押韻したかのどちらかであろう。

【口語訳】

- 1 洛陽城の北門から 北邙山へと続く道
- 2 多くの霊柩車がゴロゴロと音を立て 秋の草の中へ入って行く
- 3 車の前では 皆が薤露の歌を歌い

- 4 日々 新しい墓が作られて 高々とそびえている
- 5 朝な夕な 人々は葬儀を行ってているが
- 6 洛陽の町には さらにたくさんの人がいる
- 7 千金を積んで 高さ百尺のりっぱな碑を立てても
- 8 結局は 誰かの家の 柱の下の敷石になるのだ
- 9 この山の頂きの松柏も 半分は主も知れないもの
- 10 地下に埋もれている白骨は 土よりも多いのだ
- 11 寒食の時には どの家も 紙錢を焼いて死者に届けようとするが
- 12 鳥が 巣を作るために くわえて木に上って行ってしまふ
- 13 俗世にいて 愁いというものを知らない人がいるなら
- 14 君よ しばらく北邙山に行つてごらんなさい

【語釈】

- 1・2 洛陽北門北邙道、喪車隣隣入秋草

〔洛陽北門〕洛陽城の北門。北邙山は洛陽の北にあるので、北門を出ると「北邙道」ということになる。

詩における「洛陽北門」の表現の例は見られないが、「洛陽」と「北門」を組み合わせて用いたものとしては、古辞「長歌行二首」其二〔樂府詩集〕卷三〇に「驅車出北門、遙觀洛陽城」(車を駆つて 北門を出て、遙かに洛陽城を觀る)の句がある。これは家の北門を出て、洛陽城を見るところか。また、唐詩では王昌齡の「詠史」〔全唐詩〕卷一四二に「荷畚至洛陽、杖策遊北門」(畚を荷いて 洛陽に至り、策を杖いて 北門に遊ぶ)の句がある。

洛陽は唐の第二の都であり、22「永嘉行」(卷一)に「黃頭鮮卑入洛陽、胡兒持戟升明堂」(黃頭の鮮卑 洛陽に入り、胡兒 戟を持ち 明堂に升る)の句があったように、張籍が詩の中で洛陽について言及することは多く、また44「洛陽行」(卷七)の作もある。ただ「北門」の用例はこの詩のみのようである。

〔北邙道〕北邙については、【題解】参照。

〔北邙道〕の表現は、劉希夷の「洛川懷古」〔全唐詩〕卷八二に「君看北邙道、觸體繁蔓草」(君看よ 北邙の道、觸體 蔓草を繁うを)の例がある。

〔喪車〕本来は葬送する生者が乗る車のことであり、『周礼』春官「御史」に「王之喪車五乘」(王の喪車は五乗)といい『礼記』雜記上に「端衰・喪

車、皆無等」(端衰・喪車は、皆な等無し)というのはその意味のようであるが、ここでは次の二句の「高墳」に埋葬される死者の柩を運ぶ靈柩車と解してよいであろう。この意味での例としては、『説文解字』車部で、柩を運ぶ車である「輻(輻)」の字の説解に「喪車也」というのが古い例といえよう。

詩における以前の用例は未見。同時代の元稹の「思婦樂」(『元稹集』巻一)に「喪車四門出、何関炎瘴祭」(喪車 四門より出で、何ぞ関せん 炎瘴の祭むるに)というなど、元和期になって詩に詠じられる題材のようである。

「麟麟」車が走る音の形容。一台とも解せるが、李建崑注が北邱山は有名な墓地であるため喪車の往来が頻繁であると解しているのに従い、たくさん車と解しておいた。

『毛詩』秦風「車隣」に「有車隣隣、有馬白顛」(車有り 隣隣たり、馬有り 白顛なり)とあり、毛伝に「衆車之声」という。『經典釈文』によれば「麟麟」に作るものもあつたようである。また、李冬生注にも引く「楚辞」九歌「大司命」には「乘竜兮麟麟、高駝兮冲天」(竜に乗りて 麟麟たり、高く駝せて 天に沖る)の句がある。

詩においても、曹丕の「黎陽作詩三首」其二(『藝文類聚』巻五九)に「麟麟大車、載低載昂」(麟麟たる大車、載ち低く載ち昂し)というなど、古くからの用例があるが、陳注も引くように、張籍が敬愛した杜甫の「兵車行」(『詳註』巻二)に「車麟麟、馬蕭蕭、行人弓箭各在腰」(車 麟麟、馬 蕭蕭、行人の弓箭 各おの腰に在り)という有名な句がある。

杜甫には「兵車行」の一例のみで、張籍にもこの詩以外には用例がない。

「入秋草」秋の草の中に入っていく。秋の草は、季節感を添えると同時に、寂しさをも感じさせよう。さらに、車の通行が多いため、踏み固められた道をはみ出して草むらに入るとか、いよいよ墓地を作る場所に近づくと、道なき道を走ることになるといった状況を暗示する表現かもしれない。

「秋草」は常見のことば。『楚辞』七諫「沈江」(東方朔)に「秋草榮其將実兮、微霜下而夜降」(秋草 榮えて其れ將に実らんとするに、微霜下りて夜に降る)といい、「古詩十九首」其八(『文選』巻二九)に「過時而不采、將随秋草萎」(時を過ぎて 采らざれば、將に秋草に随いて萎えん)というなど、古くから多くの用例がある。陳注は孫楚の「征西官屬送於陟陽侯作詩」(『文選』二〇)に「晨風 岐路に飄り、零雨 秋草を被う」(晨風飄岐路、零雨被秋草)という例を引いている。

杜甫には「秦州雜詩二十首」其五(『詳註』巻七)に「浮雲 連陣没し、

秋草 遍山長し」(浮雲連陣没、秋草遍山長)というなど、四例の用例があり、張籍には、27「関山月」(巻一)に「可憐万里関山道、年年戰骨多秋草」(憐れむべし 万里 関山の道、年年 戰骨 秋草より多し)というなど、他に五例の用例がある。

静嘉堂本は「如秋草」に作る。こちらであれば、「ごとし」ではなく「ゆく」の意で解すべきであろう。

冒頭の二句、一韻でまとまっている。洛陽城の北門から北邱山へと続く道を、柩を載せた車が走る様子を詠じ、以下の描写を導き出している。

3・4 車前斉唱薤露歌、高墳新起日峨峨

「車前斉唱」喪車の前で、皆が声をそろえて歌う。

「車前」は、何でもないことばのようだが、六朝までの詩では、梁の鼓角横吹曲の「鉅鹿公主歌辞」三首其二に「車前女子年十五、手弾琵琶玉節舞」(車前の女子 年十五、手に琵琶を弾き 玉節に舞う)という一例を見るのみであり、唐に入っても元和期以前の例としては、孟浩然の「家園臥疾畢太祝曜見尋」(『全唐詩』巻一五九)に「脱君車前鞅、設我園中葵」(君が車前の鞅を脱し、我が園中の葵を設けん)といい、司空曙の「秋日趨府上張大夫」(『全唐詩』巻二九二)に「謫吏何能沐風化、空將歌頌拜車前」(謫吏何ぞ能く風化に沐せん、空しく歌頌を拜て 車前に拜す)という二例を見るのみ。

張籍にも、「車前子」(オオバコ)の意味での用例がもう一例あるのみである。

「斉唱」は、現在では中国でも日本語と同様「独唱」「合唱」と対応することばのようだが、ここでは合唱との区別がある訳ではなからう。

『抱朴子』暢玄に「清絃嘈囀以斉唱、鄭舞紛綵以螻蝻」(清絃は嘈囀として以て斉唱し、鄭舞は紛綵として以て螻蝻たり)といい、晋の清商曲辞「西曲歌」の「青聽白馬」八首其八(『樂府詩集』巻四九)に「斉唱可憐使人惑、晝夜懷歎何時忘」(斉唱の可憐 人をして惑わしむ、晝夜の懷歎 何れの時にか忘れん)というなどの例がある。後者は六朝以前の詩における唯一の例。左芬の「万年公主誄」に「挽僮斉唱、悲音激摧」(挽僮 斉唱すれば、悲音 激摧す)という例は、挽歌について斉唱と表現した例である。

唐詩においても用例は少なく、初唐期に例がなく、盛唐期の詩人では岑参の「酒泉太守席上醉後作」(『岑参集校注』巻二)に「琵琶長笛曲相和、羌兒胡雛斉唱歌」(琵琶 長笛 曲相和し、羌兒 胡雛 斉しく唱歌す)と「斉唱歌」の形の例を見るのみのようだ。大曆期に入つて、錢起の「送李四擢第

「齊唱陽春曲、唯君金玉声」(齊唱す 陽春の曲、唯だ君のみ 金玉の声なり) といひ、顧況の「早春思婦有唱竹枝歌者坐中下淚」(『全唐詩』卷二六七)に「渺渺春生楚水波、楚人齊唱竹枝歌」(渺渺として 春は生ず 楚水の波、楚人 齊唱す 竹枝の歌) というなど、ようやく用例が増える。張籍の例はこれのみである。

「薤露歌」死者の柩を挽く時に歌う歌、挽歌の曲名の一つ。薤の葉の上に降りた露の意で、その乾きやすいことから、人の命のはかなさを喩える。

李冬生注も引く、『樂府詩集』相和歌辞の「薤露」(卷二七)の解題にいう。

崔豹『古今注』曰、「薤露・蒿里、泣喪歌也。本出田横門人。横自殺、門人傷之、為作悲歌。言人命奄忽、如薤上之露、易晞滅也。亦謂人死魂魄歸於蒿里。至漢武帝時、李延年分為二曲、薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人。使挽柩者歌之、亦謂之挽歌。」

崔豹『古今注』に曰く、「薤露・蒿里は、喪を泣く歌なり。本田横の門人より出づ。横自殺し、門人 之を傷み、為に悲歌を作る。人命の奄忽たること、薤上の露の如く、晞滅し易きを言うなり。亦た人死して魂魄の蒿里に帰るを謂う。漢の武帝の時に至りて、李延年 分ちて二曲と為し、薤露は王公貴人を送り、蒿里は士大夫庶人を送る。柩を挽く者をして之を歌わしめ、亦た之を挽歌と謂う」と。

『樂府詩集』の解題では、これに続いて田横の死に始まるわけではないという説をも紹介しているが、省略することとした。この「薤露」の古辞は、「薤上露、何易晞。露晞明朝更復落、人死一去何時歸」(薤上の露、何ぞ晞き易き。露晞けば 明朝更に復た落つるも、人死して一たび去れば 何れの時にか帰らん) というものである。

陳注は『搜神記』卷六に「漢時、京師賓婚嘉會、皆作魁欄、酒酣之後、続以挽歌。魁欄、喪家之樂。挽歌、執紼相偶和之者」(漢の時、京師 賓婚の嘉會に、皆な魁欄を作し、酒酣の後、続けるに挽歌を以てす。魁欄は、喪家の樂なり。挽歌は、紼を執りて之に相い偶和する者なり) という記述を引いている。「紼」は柩を挽くための綱をいう。

「薤露」の曲名が詩に用いられた例としては、陸機の「挽歌詩三首」其一(『文選』卷二八)に「中聞且勿謹、聽我薤露詩」(中聞 且く 謹しくする勿れ、我が薤露の詩を聴け) といひ、張説の「右侍郎集賢院學士徐公挽詞二首」其二(『全唐詩』卷八七)に「既哀薤露詞、豈忘平生眷」(既に薤露の詞を哀しむ、豈に平生の眷を忘れんや) というなどの句があり、挽歌の中で

用いられることが多いようである。杜甫には用例がなく、張籍の用例はこれのみ。

「高墳新起」高い墳墓を新しく作る。喪車で運ばれてきた新たな死者のために、新しい墓を築くのである。

「高墳」は高く土を盛り上げた墳墓。

二句のみが残る魏の曹植の「寡婦詩」(『文選』卷二三謝靈運「廬陵王墓下作」李善注所引)に、「高墳鬱兮巍巍、松柏森兮成行」(高墳 鬱として 巍巍たり、松柏 森として 行を成す) といひ、陶淵明の「挽歌詩」(『文選』二八)に「四面無人居、高墳正嶢嶢」(四面 人の居無く、高墳 正に嶢嶢たり) というなどの例は、この詩と同じく擬態語を用いながら墳墓の高さを表現している。陶淵明は「擬古詩九首」其四(四部叢刊本卷四)においても「松柏為人伐、高墳互低昂」(松柏 人の為に伐られ、高墳 互いに低昂す) と用いている。この淵明の二首、特に後者は、張籍の「北邙行」の表現に影響を与えているようである。【補】参照。

唐詩における用例は少ないが、李白の「遊溧陽北湖亭望瓦屋山懷古贈同旅」(王琦注本卷一〇)に「高墳五六墩、峯兀棲猛虎」(高墳 五六墩、峯兀として 猛虎棲む) といひ、李嘉祐の「故燕國相公挽歌二首」其一(『全唐詩』二〇六)に「大夢依禪定、高墳共化城」(大夢 禪定に依り、高墳 化城を共にす) というなどの例が、張籍に先立つものである。

「日峨峨」「峨峨」はここでは墳墓が高い形容。「日」はこの句全体にかかると、日に日に新たな墓が高々と築かれていくというのであろう。

「峨峨」は、古く『毛詩』大雅「棫樸」に「奉璋峨峨、髦士攸宜」(璋を奉ずること峨峨たり、髦士の宜しき攸) と、礼儀が盛んなことを形容するのに用いられている。高さを形容した例も、古く『列子』湯問の「伯牙と鍾子期の故事で、伯牙が山をイメージして演奏したのを聞いた鍾子期が「善哉、峨峨兮若泰山」(善きかな、峨峨として泰山の若し) と見えている。

陳注は、『樂府詩集』の解題に引かれていた張協の「登北邙賦」(前出)の引用部分の最後の句を「望五陵之峨峨」として引くが、『樂府詩集』も『藝文類聚』も「鬼峨」に作っている。北邙山の帝陵を「鬼峨」の擬態語で表現した例。

陸機の「呉趨行」(『文選』卷二八)に「昌門何峨峨、飛閣跨通波」(昌門 何ぞ峨峨たる、飛閣 通波を跨ぐ) といひ、李嶠の「山」(『全唐詩』卷五九)に「地鎮標神秀、峨峨上翠氣」(地鎮まりて 神秀を標し、峨峨として 翠氣上る) というなど、唐までの詩にも、唐代に入ってから多くの用

例があるが、墳墓を表現した例は見当たらないようだ。別の擬態語で表現した例は「高墳」の語釈を参照。

杜甫には「峨峨」の用例はないようだが、張籍にはもう一例、440「洛陽行」(巻七)に「洛陽宮闕当中州、城上峨峨十二樓」(洛陽の宮闕 中州に当たり、城上峨峨たり 十二樓)の句があり、洛陽城の城楼の高さを「峨峨」と表現している。

この部分、蜀本・静嘉堂本・百名家全集本等は「白峨峨」に作っている。こちらであれば墳墓の色と高さを表現していることになる。

次の二句と同韻でひとまとまりになっている。喪車の進行を詠じた冒頭の二句を承け、葬送を詠じた四句で、この二句は挽歌を歌う様子(聴覚表現)と日々作られる墳墓の様子(視覚表現)を描写している。北邙山に挽歌の声は絶えることなく、日に日に新しい墓が築かれていく。

5・6 朝朝暮暮人送葬、洛陽城中人更多

〔朝朝暮暮〕朝も夜も。毎朝毎晩。

宋玉の「高唐賦」(『文選』一九)の序に「且為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮、陽台之下」(且に朝雲と為り、暮れに行雨と為り、朝朝暮暮、陽台の下にあり)という有名な例がある。陳注は『水経注』江水の条からこの句を引いている。

唐までの詩では、「朝朝」・「暮暮」それぞれの例はあるが、「朝朝暮暮」の例はないようである。対にして用いた例も隋の薛道衡の「重酬楊僕射山齋」(『文苑英華』卷三二七)に「朝朝散綵霞、暮暮澄秋色」(朝朝 綵霞散じ、暮暮 秋色澄む)という例が一例あるのみのようだ。

唐に入つて、喬知之の「羸駿篇」(『全唐詩』卷八一)に「歳歳年年奔遠道、朝朝暮暮催疲老」(歳歳年年 遠道を奔り、朝朝暮暮 疲老を催す)といい、孟浩然の「送王七尉松滋得陽台雲」(『全唐詩』卷一五九)に「空中飛去復飛來、朝朝暮暮下陽台」(空中 飛び去り 復た飛び來たり、朝朝暮暮 陽台に下る)というなど、用例が多くなっているが、張籍のよき友であった白居易の「長恨歌」(〇五九六)に「蜀江水碧蜀山青、聖主朝朝暮暮情」(蜀江水碧にして 蜀山青し、聖主 朝朝暮暮の情)というのは、最も人口に膾炙している。

杜甫には用例がなく、張籍の用例もこれのみのようだが、やはり張籍の友人の王建は、「射虎行」(『王建詩集』卷二)で「朝朝暮暮空手回、山下綠苗成道徑」(朝朝暮暮 手を空しくして回り、山下の綠苗 道徑を成す)と用いている。

〔人送葬〕人々が葬儀の列を見送っている。

〔送葬〕は葬送。埋葬することを見送ること。『禮記』・『春秋』等の經書や『荀子』・『莊子』等に見えることばだが、唐までの詩には用例がないようだ。

唐に入つても、初盛唐・大曆期の詩には用例がなく、元和期の詩人に至つて、王建の「送阿史那將軍安西迎旧使靈柩」(『王建詩集』卷七)に「单于送葬還垂淚、部曲招魂亦道名」(单于 葬を送りて 還た涙を垂れ、部曲 魂を招いて 亦た名を道う)といい、歐陽詹の詩題に「觀送葬」(『全唐詩』卷三四九)というなどの用例が見られるようになる。王建の「北邙行」(『王建詩集』卷一)の例については、【補】参照。

張籍にも「送葬」でまとまる例はこれのみで、287「官山祠」(巻六)に「秋草宮人斜裏墓、宮人誰送葬來時」(秋草 宮人斜裏の墓、宮人 誰か送る 葬の來たる時)という形の例がもう一例のみ見える。

〔洛陽城中人更多〕洛陽の町にはさらにたくさんの方がいる。洛陽の町に住むたくさんの方の住民は、すなわちこれから続々と北邙へと葬られる予備軍なのだということであろう。

前の二句とまとまって、葬送を詠じた部分。朝な夕な、北邙山に多くの方が埋葬されてゆくが、洛陽の町にはさらにたくさんの方が暮らしていて、これからも葬儀の列の絶えることはないと言ずる。

7・8 千金立碑高百尺、終作誰家柱下石

〔千金〕常見のことば。古くから歴大な用例がある。

詩においても、唐までの詩においては、曹植「名都篇」(『文選』卷二七)に「宝剑直千金、被服光且鮮」(宝剑 直千金、被服 光り且つ鮮やかなり)といい、陳注も引く謝朓の「和王主簿季哲怨情詩」(『文選』卷三〇)に「平生一顧重、宿昔千金賤」(平生 一顧重く、宿昔 千金賤し)というなどの用例がある。唐詩においても、虞世南の「門有車馬客」(『全唐詩』卷三六)に「赭汗千金馬、繡軸五香車」(赭汗 千金の馬、繡軸 五香の車)というなど、多くの用例がある。ただ、碑を建てる費用に関して「千金」の語を用いた例は未見。

杜甫には「後出塞五首」其一(『詳註』卷四)に「千金買馬鞭、百金裝刀頭」(千金 馬鞭を買い、百金 刀頭を装う)というなど、四例が見える。張籍の例はこれのみ。

〔立碑〕碑を建てる。ここでは墓碑を建てること。墳墓に石碑を建て、死者の生前の行跡を刻んで後世に伝えようとすることは、はるかな昔から行われていたと思われ、『文心雕龍』誄碑篇も碑の起源を上古においているが、「立碑」という表現が見えるのは、例えば『後漢書』循吏伝の童翊の伝に「化有異政、吏人生為立碑」（化して異政があれば、吏人生きながらにして為に碑を立つ）と見えるあたりからのようである。これは『文心雕龍』同篇が、碑文が盛んに作られるようになったのを後漢以来とし、その代表的な作者として蔡邕を挙げていることや、『文選』の碑文の部に収められる作品の最初の作者がその蔡邕であることと、奇しくも同じ時期であるといえよう。

「碑」という文字は、唐までの詩にも唐詩においても多く用いられているようだが、「立碑」という表現は、散文的な表現のためか、張籍以前の詩の中には（劉長卿の詩題に一例と、伝説的な人物で年代不明の寒山の詩中の一例を除けば）、用例が見当たらないようであり、張籍以前にもほとんど用例がない。似た表現である「建碑」に対象を広げても、蘇頌の「奉和聖製過晉陽宮忠制」（『全唐詩』卷七三）に「下輦崇三教、建碑当九門」（輦より下りて三教を崇び、碑を建てて九門に当たる）という例が一例見出されるのみである。

その中で、白居易は「秦中吟十首」其六に「立碑」（○○八〇）の詩があり、詩中でも「無人立碑碣、唯有邑人知」（無人立碑碣、唯有邑人知）の形で用いている。また、張籍にももう一例の用例があり、183「送裴相公赴鎮太原」（卷四）に「明年塞北清蕃落、応建生祠請立碑」（明年 塞北 清蕃落ち、応に生祠を建てて 碑を立てるを請うべし）という。

〔高百尺〕高さが百尺もある。大きな石碑を建てている。唐代の一尺は約三センチということであるから、百尺では高さ三メートルもの巨大な石碑ということになるが、もちろん誇張による強調表現。石碑が立派であればあるほど、次の句の悲惨な運命が印象づけられる。また、石碑が高大であればあるほど、一つの碑から「柱下石」はたくさん取れる訳で、取る方としては手間が省ける。

「百尺」は常見の語で多くの用例があるが、碑についての用例は未見。なお、18「古釵嘆」（卷一）に「古釵墮井無顔色、百尺泥中今復得」（古釵 井に落ちて 顔色無し、百尺の泥中 今復た得たり）と見えた。その【語釈】も参照。ここでは、先に挙げた陶淵明の「擬古詩九首」其四（前出）に、楼閣の描写ではあるが、「迢迢百尺楼、分明望四荒」（迢迢たり 百尺の楼、分明に 四荒を望む）の句があるという例を挙げておこう。

「高百尺」の形では、枚乗の「七発八首」其二（『文選』卷三四）に「竜門之桐、高百尺而无枝」（竜門の桐は、高さ百尺にして枝無し）という古い例があるが、唐までの詩では北齊の蕭・の「臨高臺」（『樂府詩集』卷一八）に「崇台高百尺、迥出望仙宮」（崇台 高さ百尺、迥かに出でて 仙宮を望む）という例を見るのみ。唐詩においても、初盛唐に用例が見えず、大曆期の韋忠物の「酒肆行」（『全唐詩』卷一九四）に「豪家沽酒長安陌、一旦起樓高百尺」（豪家 酒を沽る 長安の陌、一旦 楼を起こして 高さ百尺）という一例があるのみのような。張籍の例もこれのみ。王建には二例見える。

〔終作誰家柱下石〕結局は誰かの家の柱の下の石となるのだ。大枚をはたいて建てたりつばな墓碑も、いずれはどこかの家の柱の礎石にされてしまう。

「誰家」は常見の語。疑問詞であるが、ここでは不定の用法。詩においてもたくさんさんの用例があるが、この詩と関わりの深い例を挙げれば、先に触れた「薤露」とペアになる「蒿里」の古辞（『樂府詩集』卷二七）に「蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚」（蒿里は 誰が家の地ぞ、魂魄を聚斂して 賢愚無し）という。また、張載の「七哀詩」（『文選』卷二三）には「借問誰家墳、皆云漢世主」（借問す 誰が家の墳ぞと、皆な云う 漢の世主なりと）の句があるが、この詩は墳墓の地として北邙山を描いた早期の例として注目される。【補】参照。

唐では駱賓王の「樂大夫挽詞五首」其二（『全唐詩』卷七八）には「蒿里誰家地、松門何代丘」（蒿里 誰が家の地ぞ、松門 何れの代の丘ぞ）と、「蒿里」に基づく表現が見られる。また、王建の「北邙行」（前出）では、墓碑の再利用に関する句で、「誰家」の語が用いられている。【補】参照。「柱下石」は柱を立てるための礎石のことであろう。用例未見。

以上、二句で一韻。前の二句で、今後も葬儀が絶えることはないと言ったのを承けて、今大金を積んでつばな墓碑を建てたところで、続々と新たな死者がやってくるのだから、いずれは忘れられて、どこかの家の柱の礎石になるのが運命だと詠ずる。前の句は「千金」と「百尺」という数字の対比がなされている。また、墓碑は死の象徴、大きな礎石を持つ家は現世の栄華の象徴という対比もあるかもしれない。

この二句以下12句まで、「古詩十九首」其十四（『文選』卷二九）にいう「古墓犁為田、松柏摧為薪」（古墓 犁かれて田と為り、松柏 摧かれて薪と為る）の状況を詠じている。

9・10 山頭松柏半無主、地下白骨多於土

「山頭」山上。常見の語。『古今事文類聚』前集卷五八は「隴頭」に作り、『全唐詩』の注には「一作・(壟)」という。

「山頭」であれば、北邙山の上。王建の「北邙行」(前出)にも「北邙山頭少閑土、尽是洛陽人旧墓」(北邙山頭 閑土少なし、尽く是れ 洛陽の人の旧墓)、あるいは「山頭澗底石漸稀、尽向墳前作羊虎」(山頭 澗底 石漸稀に、尽く墳前に向いて 羊虎を作す)と用いられている。

一方「隴頭」は、陝西・甘肅両省の境にある隴山のほとりの意味で用いられることが多く、樂府題「隴頭水」もその意味であるが、この詩に当てはめれば、「壟(壟)」の文字と通じて、おか・うねの意であろう。

その場合、陸機の「門有車馬客行」(『文選』卷二八)に「墳壟日月多、松柏鬱芒芒」(墳壟に 日月多く、松柏 鬱として芒芒たり)といい、張載の「七哀詩二首」其一(前出)に「頽隴並壘發、萌隸營農圃」(頽隴 並びに壘發し、萌隸 農圃を営む)というような表現が意識されていたかもしれない。

「松柏」松とコノテガシワ。常緑樹の代表で、節操の堅いこと・永遠に不変であることを象徴し、墓地に植えられる木であった。

陳注が『論語』子罕の「歳寒、然後知松柏之後凋也」(歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るを知るなり)という孔子のことばを引くのは、節操の堅いことを象徴する例。

『毛詩』にも見え、古くからたくさん用例があることばで、墓地に植える木であることから、上に挙げた句の中にも多くの例が見えた。新しい用例も交えながら、時代順に並べておこう。すでに引いたものは訓読のみを挙げる。

前の二句のまとめの部分に引いた「古詩十九首」其十四(前出)に「古墓犁かれて田と為り、松柏 摧かれて薪と為る」の句があり、「高墳」の用例に引いた曹植の「寡婦詩」(前出)に、「高墳 鬱として 巍巍たり、松柏 森として 行を成す」の句があり、「山頭」の部分に引いた陸機の「門有車馬客行」(前出)には「墳壟に 日月多く、松柏 鬱として芒芒たり」とあった。また、これまで其一方の方にしばしば触れた張載の「七哀詩二首」(前出)では、其二に「願望無所見、唯睹松柏陰」の句がある。また、「高墳」の用例に引いた陶淵明の「擬古詩九首」其四(前出)にも「松柏 人の為に伐られ、高墳 互いに低昂す」の句があった。

唐では、やはり沈佺期の「邙山」(『全唐詩』卷九七)に「城中日夕歌鐘起、山上唯聞松柏声」(城中 日夕 歌鐘起り、山上 唯だ聞く 松柏の声)の例を挙げねばならないだろう。また、王建の「北邙行」(前出)には「車

轍広若長安路、蒿草少於松柏樹」(車轍の広きこと 長安の路の若く、蒿草は 松柏の樹よりも少なし)という句もある。この二首については【補】参照。

張籍にはもう一例、422「樵客吟」(卷七)に「松柏生枝直且堅、与君作屋成家宅」(松柏 枝を生じて 直く且つ堅し、君が与に 屋を作り 家宅を成さん)の句がある。

「半無主」松柏の半分は主が分らない。松柏が植えられた墓の半数は、誰が埋葬されたのか分からなくなっている。墳墓の地としての北邙山の歴史の長さ、そこに埋葬された人の多さが表現される。

「半無主」という例は見当たらないものの、「無主」ということばは諸書に見え、以前の詩にも用例が見えている。ただ、ここで張籍は、これまでもしばしば挙げた陶淵明の「擬古詩九首」其四(前出)に「頽基無遺主、遊魂在何方」(頽基 遺主無く、遊魂 何れの方にか在る)という表現を意識している。淵明の場合は「無遺主」で死者をまつる遺族がいまいこというが、張籍はそれを「無主」として、墓の主が分からなくなっているという意味で用いている。

「地下」地中を意味すると同時に、死者の国をも意味することばである。

仲長統の「見志」二首其二(『後漢書』仲長統伝)に「寄愁天上、埋憂地下」(愁いを天上に寄せ、憂いを地下に埋む)といい、「孤兒行」古辭(『樂府詩集』卷三八)の乱に「将与地下父母、兄嫂難与久居」(将与地下の父母に与えんとす、兄嫂 与に久しくは居り難し)といい、古い例もあるが、その後の詩における用例は少ない。

唐までの詩では傳玄に一例、初唐では沈佺期に一例見えるのみ(いずれも挽歌の例)であり、盛唐でも他には岑参の挽歌に一例が見えるのみである中で、杜甫は、「懷旧」(『詳註』卷一四)に「地下蘇司業、情親独有君」(地下の蘇司業、情の親しむは 独り君有るのみ)というなど、四例の用例を残しているのが注目される。張籍の用例はこれのみ。

「白骨多於土」死者の白骨は土よりも多い。松柏の主も分からぬほど多くの人が埋葬されているため、土よりも白骨の方が多のである。北邙山は白骨の山であり、その多くが、誰のものとも分からぬ骨だといっているのであろう。

「白骨」は、蔡琰の「悲憤詩」二首其二(『後漢書』列女伝)に「白骨不知誰、縱橫莫覆蓋」(白骨 誰なるかを知らず、縱横して 覆蓋する莫し)といい、王粲の「七哀詩二首」其一(『文選』卷二二)に「出門無所見、白

骨蔽平原（門を出づるも 見る所無し、白骨 平原を蔽う）というなど、古くから詩の中に用いられていることは。

唐詩においても、王無競の「北使長城」（『全唐詩』卷六七）に「死人如乱麻、白骨相撐委」（死人 乱麻の如く、白骨 相い撐委す）というなど用例は多いが、杜甫の「兵車行」（『詳註』卷二）の「君不見青海頭、古來白骨無人收」（君見ずや 青海の頭、古來 白骨 人の収むる無し）の表現を、張籍は7「征婦怨」（卷一）で「万里無人收白骨、家家城下招魂葬」（万里人の白骨を収むる無く、家家 城下にて 魂を招きて葬る）と用いていた。その【語釈】も参照。なお、「征婦怨」のこの部分には、次の二句に見える「家」の語も用いられている。

張籍の「白骨」の用例は、この詩と「征婦怨」に見えるのみ。

「多於土」は以前の用例が見出せなかった。後の韋莊の「憫耕者」（『全唐詩』卷七〇〇）に「如今暴骨多於土、猶点郷兵作戍兵」（如今 暴骨 土よりも多きに、猶お 郷兵を点じて 戍兵と作す）というのは、張籍のこの句から影響を受けたものか。

以下の二句と同じ韻でまとまりをなす。前の部分でせっかく建てた石碑も結局は家の礎石となることを述べたのを承け、この二句では、これまで埋葬された膨大な死者のうち、大半が無縁仏となってしまうことを述べ、次の二句へと繋がっていく。前の句は地表の上を詠じ、後の句は地下を詠ずる。常緑の松柏と白骨に象徴されるはかない命との対比も感じられる。

11・12 寒食家家送紙錢、烏鳶作窠銜上樹

「寒食」は冬至から数えて一〇五日目の日。火を使うことが禁じられ、冷たいものを食べる。寒食が終わると清明節であり、寒食と清明は一続きの節日と考えられていた。その行事の一つが墓参りであり、この詩にはそのことが詠じられている。

8 「白紵歌」（卷一）に「衣裳着時寒食下、還把玉鞭鞭白馬」（衣裳 着く時 寒食の下、還た玉鞭を把りて 白馬を鞭たん）の句があった。寒食に関する基本的な文献については、その【語釈】に挙げた。

「家家」どの家も。常見の語。張籍にも九例あり、すでに「白骨」のところまで引いた7「征婦怨」に見えていたほか、12「築城詞」・22「永嘉行」（以上卷一）にも用いられていた。

「送紙錢」紙錢を送る。「紙錢」は紙で作られたお金。死者の霊や神を祭る

ために燃やされる。

唐までの詩に用例が見えず、『全唐詩』でも元和期以前の詩人には用例がないようだが、敦煌で発見された王梵志の詩（項楚『王梵志詩校注』卷二、同書作品番号〇三四）に「貯積留妻兒、死得紙錢送」（貯積して 妻兒に留め、死して 紙錢の送らるるを得）というなど数例見えており、唐の初期にはすでに紙錢を燃やす習慣があったようである。

元和期の詩人には用例が多いが、そのうち王建の「寒食行」（『王建詩集』卷一）に「三日無火燒紙錢、紙錢那得到黃泉」（三日 火無く 紙錢を焼く、紙錢 那ぞ黃泉に到るを得ん）といい、白居易の「寒食野望吟」（〇六〇一）に「風吹曠野紙錢飛、古墓累累春草綠」（風 曠野を吹きて 紙錢飛び、古墓 累累として春草緑なり）という例などは、寒食の墓参の折りに紙錢を燃やすことに関する例である。

張籍にはもう一例、369「華山廟」（卷六）に「手把紙錢迎過客、遺求恩福到神前」（手に紙錢を把りて 過客を迎え、恩福を求めて 神前に到らしむ）という例がある。こちらは華山の神に紙錢を送る例。

「烏鳶」鳶はトビ、トンビ。すなわち「烏鳶」でトビのことであろうが、この二字には異同が多く、蜀本・百家集全本・『樂府詩集』等では「鴟鵂」に作り、静嘉堂本・『全唐詩』等では「烏鳶」に作る。「鴟」はトビまたはフクロウのことを指し、「鴟鵂」の二字でトビのことをいうと思われる。「烏鳶」であれば、カラスやトビということになる。

このうち、最も古くから用いられていることばは「烏鳶」である。『周礼』夏官「射鳥氏」の条に「祭祀、以弓矢毆烏鳶」（祭祀には、弓矢を以て烏鳶を毆る）とあり、鄭玄の注に「烏鳶、善鈔盜。便汚人」（烏鳶は、善く鈔盜す。便ち人を汚す）と注されていて、かすめとるのが巧みな鳥とされている。また、陳注も引く『莊子』列禦寇に、莊周が死に臨み弟子たちが厚く葬ろうとしたのでそれをとがめたところ、弟子たちが「吾恐烏鳶之食夫子也」（吾 烏鳶の夫子を食らうを恐るるなり）と言い、莊周は「在上為烏鳶食、在下為螻蟻食」（上に在りて烏鳶の食と為らば、下に在りては螻蟻の食と為らん）云々と答えたという話がある。人の死骸を食らう鳥とされており、『周礼』と似たようなイメージで用いられているといえよう。

詩においても、阮籍の「詠懷詩八十二首」其三十八（『阮籍集校注』卷下）に「捐身棄中野、烏鳶作患害」（身を捐てて 中野に棄てられ、烏鳶 患害を作す）と、『莊子』の故事をそのまま用いているし、戎昱の「塞下曲」六首其三（『全唐詩』卷二七〇）に「塞北無草木、烏鳶巢僵屍」（塞北 草木無く、烏鳶 僵屍に巢くう）というのも、不吉な鳥というイメージで用いられ

ていよう。

杜甫に一例、「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士」(『詳註』卷三)に「鷹隼亦屈猛、鳥鳶何所蒙」(鷹隼も亦た猛を屈す、鳥鳶 何の蒙る所ぞ)という例はあまりマイナスイメージを持たないようだが、李白の「戰城南」(王琦注本卷三)に「鳥鳶啄人腸、銜飛上挂枯樹枝」(鳥鳶 人の腸を啄み、銜み飛んで上に挂く 枯樹の枝)という例は、この詩の表現と似通っており、張籍に影響を与えた可能性がある。

次に「鷓鴣」であるが、このことばの用例としては、鮑照の「代空城雀」(四部叢刊本卷三)に「高飛畏鷓鴣、下飛畏網羅」(高く飛んでは 鷓鴣を畏れ、下に飛んでは 網羅を畏る)というのが古いようであり、雀が恐れる猛禽として描かれている。唐までの詩には鮑照の他に用例がないようだが、唐詩においては韋応物の「鷓鴣巢」に「野鷓野鷓巢林梢、鷓鴣恃力奪鷓巢」(野鷓 野鷓 林梢に巢くうも、鷓鴣 力を恃んで 鷓鴣の巢を奪う)といい、さらに鷓鴣を食い殺す様子を描いている。このことばも「鳥鳶」と同様、かなりマイナスイメージがあるようだ。

最後に「鳥鳶」であるが、このことばの張籍以前の用例は見出すことができなかった。

以上の結果からすれば、鳥と鳥は間違えやすい文字でもあり、李白によく似た表現がある「鳥鳶」が最も穏当かと思われ、それに次いで「鷓鴣」に作るのがよいかと思われるが、斬新な表現を工夫しようとした可能性も皆無ではないだろうから、ここではとりあえず底本を尊重して「鳥鳶」としておいた。

「作窠」巢を作る。「窠」は巢。その材料として紙銭をかすめ取るのである。『説文解字』には「鳥巢也。在樹曰巢、在穴曰窠」(鳥の巢なり。樹に在るを巢と曰い、穴に在るを窠と曰う)というが、ここでは区別せず用いているのである。なお、『古今事文類聚』は「巢」に作る。

散文的な表現のためか、「作窠」・「作巢」ともに用例はほとんどなく、唐までの詩においては、『隋書』五行志に引く北齊の時の童謡に「作窠猶未成、拳頭失鄉里」(窠を作りて 猶お未だ成らざるに、頭を挙げて 郷里を失う)という例が見えるのみ。これは雀についていう例。

唐に入ってから、張籍以前の例は、大曆期の馮著の「燕銜泥」(『全唐詩』卷二一五)に「爾莫厭老翁茅屋低、梁頭作窠梁下栖」(爾 厭う莫れ 老翁の茅屋の低きを、梁頭に窠を作り 梁下に栖め)という例を見るのみ。張籍にも他に用例がない。

〔銜上樹〕口にくわえて樹に上る。

前の二句で多くの死者が無縁仏になっていると述べたのを承けて、子孫の供養をうけている死者にも悲惨な運命が待ち受けていることを詠じた二句。墓参の日である寒食には、どの家も紙銭を焼いて死者に届けようとするが、トビが現れて、巢を作るためにくちばしにくわえて木に登っていつてしまおう。たとえまつる子孫がいたとしても、死者に届くことはないのである。

なお、陳注は、范成大「寒食郊行書事二首」其一(『石湖詩集』卷一)の領聯「鷺窺蘆箔水、鳥啄紙錢風」(鷺は窺う 蘆箔の水、鳥は啄む 紙錢の風)の後の句が、張籍のこの句に基づいていることを指摘している。

13・14 人居朝市未解愁、請君暫向北邙遊

〔人居朝市〕人々は都会にいて。

「人居」という表現、曹植の「薤露行」(『藝文類聚』卷四一)に「人居一世間、忽若風吹塵」(人 一世の間に居るや、忽として 風の塵を吹くが若し)といい、潘岳の「哀詩(楊氏七哀詩)」(『藝文類聚』卷三四)に「人居天地間、飄若遠行客」(人 天地の間に居るや、飄として 遠行の客の若し)というなど、人生のはかなさを表現する中に用例が見える。また、人の住まいの意味ではあるが、「高墳」の部分で引いた陶淵明の「挽歌詩」(前出)に「四面無人居、高墳正嶮巖」(四面 人の居無く、高墳 正に嶮巖たり)と見えた。淵明にはこの他に、「歸園田居六首」其四(四部叢刊本卷二)に「徘徊丘壠間、依依昔人居」という例もある。

「朝市」は朝廷と市場。人々が集まるにぎやかな場所。俗世のまつただ中であり、俗世を離れた隠遁の場所と対をなす。

古く『左伝』にも見える常見の語だが、この表現の用例としては、陳注も引く王康琚の「反招隱詩」(『文選』卷二二)に「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」(小隱は陵藪に隠れ、大隱は朝市に隠る)という句を挙げるべきであろう。また、先に挙げた陶淵明の「歸園田居六首」其四(前出)に「一世異朝市、此語真不虛」(一世 朝市を異にす、此の語 真に虚ならず)というなど、唐までの詩にも用例は多い。

唐詩においても、王勃の「懷仙」(『全唐詩』卷五五)に「道存蓬瀛近、意愜朝市賒」(道存すれば 蓬瀛も近く、意愜えば 朝市に賒る)といい、李白の「走筆贈獨孤駙馬」(王琦注本卷九)に「一別蹉跎朝市間、青雲之交不可攀」(一別 蹉跎たり 朝市の間、青雲の交 攀るべからず)というなど、用例は多い。ただ、杜甫には用例がないようであり、張籍の用例もこれのみ。

「未解愁」愁いというものを理解していない。俗世の楽しみに浸っていて、愁いを知らない。

「解愁」は、あまり用例のないことば。唐までの詩においては、曹操の「短歌行」（『宋書』樂志）に「以何解愁、唯有杜康」（何を以てか 愁いを解かん、唯だ杜康有るのみ）といい（『文選』は「解憂」に作る）、庾信の「秋日詩」に「頼有南園菊、残花足解愁」（頼いに 南園の菊有り、残花 愁いを解くに足る）。というなど、愁いを解く・うさを晴らすの意で用いられているようだ。

唐に入ってから、こちらの意味での用例もあるようだが、盧綸の「将赴京留献令公」（『全唐詩』卷二七六）に「力微恩重諒難報、不是行人不解愁」（力は微にして 恩は重く 諒に報い難し、是れ行人ならざれば 愁いを解せず）という例などは、このことと同じく愁いというものを理解するの意味で用いられている。

杜甫には「解愁」の例はないものの、「未解」の用例は数例、特に「月夜」（『詳註』卷四）の「遥憐小兒女、未解憶長安」（遥かに憐れむ 小兒女の、未だ 長安を憶うを解せざるを）の有名な句は、張籍のこの句と通じるものがある。張籍には「未解」「解愁」ともにこの例のみ。

「請君」あなたにお願いする。君よ、どうかうしてくれ。読者あるいは相手に対する呼びかけのことばで、願望を表現する。

唐までの詩では、祖孫登（一に釈惠標の作という）の「詠水詩」（『藝文類聚』八）に「請君看皎潔、知有淡然心」（君に請う 皎潔なるを看よ、淡然の心有るを知らん）という例が見えるのみである。唐に入って用例が多くなり、贈答や送別の作で相手に対して用いるものと、この詩のように、楽府等で読者（聴衆）に対して用いるものの二種に大別できるようである。後者の例としては、李白の「將進酒」（王琦注本卷三）に「与君歌一曲、請君為我側耳聽」（君の与に 一曲を歌わん、君に請う 我が為に 耳を側て聴け）というなどの例がある。

なお、21「謙客詞」（卷一）に「請君看取園中花、地上漸多枝上稀」（君に請う 園中の花を看取せよ、地上漸く多くして 枝上稀なり）の句が見えた。その【語釈】も参照。

「暫向北邙遊」しばらく北邙山に行ってみてください。北邙山に行ってください。

「向」は「於」の意で用いられている。「遊」は、遊ぶ意味ではなく、出かける意味で解釈した。

結びの二句。読者に対して、愁いというものを知らないのであれば、北邙山に行ってみなさいと勧めて結ぶ。花の都と隣り合わせになっている死の山を訪ねることによって、人命や栄華のはかなさを知らねばならないというのである。

【補】

一 「北邙行」の構成について

この詩は、押韻によれば 1・2 / 3・6 / 7・8 / 9・12 / 13・14 の五つの部分に分かれるが、意味の上からは以下の三つの段落に分けることができる。

1・6 葬送の様子（洛陽の町から日々多くの死者が北邙山に送られてくる）

7・12 死者の悲惨な境遇（厚葬もいつかは無駄になり、供養も死者には届かない）

13・14 読者の注意を喚起する結び

換韻によって独立した末尾の二句で、読者への呼びかけがなされており、これまでもしばしば見られた、印象的な結びの二句を工夫した作といえるだろう。

二 北邙山を詠じた詩について

ここでは、北邙山を詠じた詩について見ておこう。

植木氏前掲書も指摘するように、古く「古詩十九首」其十三（『文選』卷二九）に「驅車上東門、遙望郭北墓。白楊何蕭蕭、松柏夾広路」（車を上東門に駆り、遙かに郭北の墓を望む。白楊 何ぞ蕭蕭たる、松柏 広路を夾む）云々と歌われるのが、上東門が洛陽城の東三門のうち最も北にある門の名であることから、北邙山のことを詠じたものとされており、この山が墓地の山として詠じられた古い例といえよう。

ただ、山の名が詩歌に詠じられた例では、陳注にも引く梁鴻の「五噫歌」（『後漢書』本伝）に「陟彼北芒兮噫、顧覽帝京兮噫」（彼の北芒に陟り 噫、帝京を顧覽す 噫）といい、李冬生注にも引く後漢の靈帝末年の京師の童謡（『後漢書』五行志）に「侯非侯、王非王。千乘万騎上北芒」（侯か 侯に非

ず、王か 王に非ず。千乗万騎 北芒に上る」というように、特に墓地の山というイメージはなかったようである。

魏から西晋にかけての詩においても、曹植の「送宓氏詩二首」其一(『文選』卷二〇)では、冒頭に「歩登北邙阪、遙望洛陽山」(歩みて 北邙の阪を登り、遙かに望む 洛陽の山)と述べた後、洛陽城の荒廃ぶりの描写へと移り、劉伶の「北芒客舍詩」(『藝文類聚』卷七)でも、北邙山中の静謐と寂寞を詠じているなど、特に墳墓の地というイメージは強くないようだ。『樂府詩集』の解題に引かれた張協の「登北邙賦」(前出。また『藝文類聚』卷七にはより長い本文を収める)でも、墓地の山というのは山の属性の一部として詠じられているといえよう。

西晋の詩で、山名を明確にしながら墳墓の山というイメージを主題として詠じたものとしては、語釈でも触れた張載の「七哀詩二首」其一(前出)が挙げられよう。冒頭で「北芒何墨墨、高陵有四五。借問誰家墳、皆云漢世主」(北芒 何ぞ墨墨たる、高陵 四五有り。借問す 誰が家の墳ぞと、皆な云う 漢の世主と)と、後漢の皇帝の陵墓を描き出し、さらに、その陵墓が盗掘に遭い、崩れて荒れ果てた様子を詳細に描写して、皇帝生前の栄華と死後の無惨な様子との格差に慨嘆を発している。「北芒」の山名はもちろん、「誰家」の表現が張籍の「北邙行」に見えたほか、「高陵」は「北邙行」の「高墳」と響き合う。

『文選』に収められたこの詩は、恐らく張籍の「北邙行」にも影響しているようだが、東晋に入って、これも語釈の中ではば触れた陶淵明の「擬古詩九首」其四(前出)は、さらに大きな影響を与えている。これは全文を挙げておく。

- | | |
|----------|-------------|
| 1 迢迢百尺楼 | 迢迢たり 百尺の楼 |
| 2 分明望四荒 | 分明に 四荒を望む |
| 3 暮作帰雲宅 | 暮には 帰雲の宅と作り |
| 4 朝為飛鳥堂 | 朝には 飛鳥の堂と作る |
| 5 山河滿目中 | 山河 目中に満ち |
| 6 平原独茫茫 | 平原 独り茫茫たり |
| 7 古時功名士 | 古時 功名の士 |
| 8 慷慨爭此場 | 慷慨して 此の場を争う |
| 9 一旦百歳後 | 一旦 百歳の後 |
| 10 相与還北邙 | 相い与に北邙に還る |
| 11 松柏為人伐 | 松柏 人の為に伐られ |
| 12 高墳互低昂 | 高墳 互いに低昂す |

- | | |
|----------|--------------|
| 13 類基無遺主 | 類基 遺主無く |
| 14 遊魂在何方 | 遊魂 何れの方にか在る |
| 15 榮華誠足貴 | 榮華 誠に貴ぶに足るも |
| 16 亦復可憐傷 | 亦た復た 憐れみ傷むべし |

傍線部は張籍の「北邙行」に用いられている詩語および影響を与えていると思われる表現である。

その後、六朝期においては、時には単に洛陽近郊の山の名として、時には墓地のイメージを帯びながら詩の中に詠じられているが、詩の主題となることはなかったようだ。

唐に入ると、初唐の詩人に北邙山を主題とした作品が多く見られるようになる。中でも特に有名なのは、植木氏も「詩跡としての邙山の地位を確立した絶唱」(『唐詩の風景』)とする、沈佺期の「邙山」であろう。

- | | |
|-----------|--------------|
| 1 北邙山上列墳塋 | 北邙山上 墳塋列なり |
| 2 万古千秋对洛城 | 万古千秋 洛城に対す |
| 3 城中日夕歌鐘起 | 城中 日夕 歌鐘起こり |
| 4 山上唯聞松柏声 | 山上 唯だ聞く 松柏の声 |

先に【題解】でも述べたように、初唐においては、『樂府詩集』や『全唐詩』には見られない、北邙山を詠じた樂府的作品も作られているようだ。一つは敦煌写本に残る劉希夷の「北邙篇」(『補全唐詩』)であり、一つは宋之間の「北邙古墓」(『全唐詩續拾』八)である。前者は七言三十八句、後者は七言十八句に及ぶ長篇なので詩は省略するが、生前に榮華を誇っていた者もいつかは北邙山に葬られ、長い時が流れて墓は荒れ果ててしまうことが、洛陽の繁榮と対比的に詠じられている。また初唐には鄭世翼の「登北邙還望京洛」(『全唐詩』卷三八)もあり、五言二十二句の排律の形式で、やはり同じような内容が詠じられている。これらの例からすると、初唐の時期には、死の山である北邙山(および洛陽の繁榮ぶりと)の対比が、詩のテーマとして大きくクローズアップされていたことが想像される。

その後、盛唐や大暦の頃の詩人には北邙山を詩の主題とするものは見当たらないようであり、単にそういつた作が減びてしまった訳ではないとすれば、初唐の頃にはポピュラーでありながら、盛唐〜中唐初期には下火になっていった題材が、王建や張籍によって再発見されたともいえるであろう。

三 王建「北邙行」との比較

では、張籍の作と王建の作にはどのような共通点・相違点があるだろうか。王建の「北邙行」は次のようなものである。

- | | |
|------------|-----------------|
| 1 北邙山頭少閑土 | 北邙山頭 閑土少なし |
| 2 尽是洛陽人旧墓 | 尽く是れ 洛陽の人の旧墓 |
| 3 旧墓人家婦葬多 | 旧墓 人家 婦葬すること多く |
| 4 堆著黄金無置処 | 黄金を堆著して 置く処無し |
| 5 天涯悠悠葬日促 | 天涯悠悠として 葬日促し |
| 6 崗岨崎嶇不停轂 | 崗岨崎嶇として 轂を停めず |
| 7 高張素幕繞銘旌 | 高く素幕を張りて 銘旌を繞らし |
| 8 夜唱挽歌山下宿 | 夜 挽歌を唱ひて 山下に宿す |
| 9 洛陽城北復城東 | 洛陽城北 復た城東 |
| 10 魂車祖馬長相逢 | 魂車 祖馬 長に相い逢う |
| 11 車轍廣若長安路 | 車轍の廣きこと 長安の路の若く |
| 12 蒿草少於松柏樹 | 蒿草は 松柏の樹よりも少なし |
| 13 山頭澗底石漸稀 | 山頭 澗底 石漸く稀に |
| 14 尽向墳前作羊虎 | 尽く墳前に向いて 羊虎を作す |
| 15 誰家石碑文字滅 | 誰が家の石碑ぞ 文字滅する |
| 16 後人重取書年月 | 後人重ねて取り 年月を書す |
| 17 朝朝車馬送葬回 | 朝朝 車馬 送葬して回り |
| 18 還起大宅与高台 | 還た起こす 大宅と高台と |

(大意) 北邙山には遊んでいる土地はなく、全て洛陽の人の古い墓地。古い墓地に多くの人が葬ろうとし、大金を積んでも空きはない。天の果てははるか遠いが葬儀の日取りは迫っており、でこぼこした坂道でも車を停める余裕もない。白い幕を張り葬儀の旗を並べ、夜挽歌を歌って山のふもとで宿る。洛陽の町の北でも東でも、葬送の車馬がいつも出くわしている。長安のように幅広い車も通れる道で、雑草も生えず松や柏の木の方が多いほど。山からも川からも石を取って羊や虎の像を作るので、石がすっかり珍しくなった。どこかの家の墓碑の文字がかすれていると、後の人がそれを再利用して新しく文字を書き付ける。毎朝毎朝、葬送した車馬が帰ってくると、今度は大き

な屋敷や高い楼台を建て始める。

細かい点を挙げればきりがないので、主なものについて述べることにするが、両者の共通点としては、葬送の様子が非常に詳しく詠じられていることが挙げられよう。張籍の作からは、寒食の日には人々が紙銭を焚いて供養していたことがうかがえるし、王建の作からは、埋葬の折りに北邙山のふもとで宿ったことや近くの川で採れた石で虎や羊の石像を作ったことがうかがえる。また、両者とも墓石の再利用について言及しており、当時の習慣がよく分かる。こういった点は、初唐までの作品においてはあまり詳しく詠じられてはいなかったようである。

主な相違点としては、結びの二句の表現が挙げられよう。張籍の方は、読者に呼びかけることによって、自己の主張を明確にしているのに対して、王建の方は、前の部分で北邙山での葬送の様子を細かく詠じてきたのを承けて、その葬送を行った人々が、都に帰ったとたんに死のことを忘れ、大きな邸宅を造営する様子を対比的に詠じている。張籍の方が直接的で分かりやすく、王建の方が暗示的で余韻があるといえようか。それぞれの工夫の跡が見られる部分である。

また、初唐以前の作では、昔の墓地の変化や荒廃を詠じて、いくら厚く葬っても後には無駄になるという方向で死者の悲惨さを述べるのに対し、張籍の作は、それに加えて、紙銭の部分で供養する遺族がいても死者には届かないと述べ、死者の悲惨さをさらに強調する。これは張籍が工夫した点であるが、従来の方向を一步進めたに過ぎないともいえる。

それに対して王建の作は、死者のことよりも生者の狂奔ぶりが中心になっており、全体的な雰囲気は従来の作品とは異なるものになっている。その点で非常に斬新である一方、死者の運命を描かないため、人生や栄華のはかなさがあまり感じられず、最後の二句との対比がさほど生きてこないようにも感じられる。その点では張籍の作の方がまとまりがよいともいえる。

その他、同じ墓石の再利用を詠じながら、張籍の方は家の礎石にされてしまうことを詠じて、遺族の願ひもむなく全く別のものに利用されてしまうことが強調され、王建の方は新たな墓石にされてしまうことを詠じて、再利用が永遠に繰り返されて行くであろうことを想像させるなど、細かい違いは色々あるが、ここでは省略することとした。(橘)